第 142 回埋蔵文化財セミナー資料

淀川水系の古墳を考える！

- 継体朝の地域有力者たち -

趣旨説明「継体朝の地域有力者たち」

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
筒井 崇史　企画調整係長　P１-P４

報告１「京都府南部の墓制　ー城陽市芝山古墳群の調査成果を中心にー」

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
菅 博絵　調査員　P５-P14

報告２「古墳時代後期の墓制　ー近江の継体朝を中心にー」

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
堀 真人　副主幹　P15-P26

報告３「中小古墳からみた継体朝の摂津　ー三島地域を中心にー」

高槻市立今城塚古代歴史館
今西 康宏　学芸員　P27-P37

日時　令和元年 11 月 9 日（土）
午後 1 時 30 分 ~ 午後 4 時 30 分

場所　長岡京市立産業文化会館　大会議室

主催　京都府教育委員会
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京埋セミナー資料 No.142 － 436

趣旨説明

～継体朝の地域有力者たち～

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
筒井　崇史

１．はじめに

今回の埋蔵文化財セミナーでは、本日報告をします城陽市芝山（しばやま）古墳群の発掘調査成果をうけて、６世紀前半を中心とする、京都府南部の古墳時代後期の地域の有力者たちが造営した古墳群を取り上げます。また、芝山古墳群やその被葬者についてさらに検討するために、大阪府北部と滋賀県の事例を取り上げることとし、本セミナーのテーマを「淀川水系の古墳を考える」と題しました。

ここで取り上げる古墳群は、巨大な前方後円墳や大型の円墳などではなく、各地に造られた中小規模の古墳を対象とします。その被葬者は、各地を治めた「首長」よりも下位に位置する地域の有力者と考えています。また、「地域」とは、古代における「国」や「郡」といった行政区画の領域よりもやや狭く、小規模な河川の水系によって形成された地理的なまとまりを想定しています。

ところで、この６世紀前半は『日本書紀（にほんしょき）』によると「継体（けいたい）天皇」という大王が活躍した時代です。ただし、厳密にいうと「天皇」号は７世紀後半に出現すると考えられているので、７世紀以前の天皇のことを古代史や考古学の分野では「○○大王」と呼ぶことが多いことから、ここでも「継体大王」と呼ぶこととし、その時期を指して「継体朝」という言葉を使います。ここでは「継体大王」と「地域有力者」という単語をキーワードに、このセミナーの狙いについて述べたいと思います。

２．「継体大王」とは

継体大王の「継体」も実は後世に付けられた呼び名なので、実際に何と呼ばれていたかはわかっていません（本名は「ヲホド」と伝えられています）。

さて、この継体大王は近江（おうみ）（滋賀県）で生まれ、越前（えちぜん）（福井県）で育ったと伝えられます（図１）。継体大王は、それまでの大王とは異なる系統の出身でした。しかし、武烈（ぶれつ）大王に後継者がいないことから大和の有力豪族たちによって、大王に擁立されました。継体大王は、表１にもあるように、朝鮮半島に出兵したり、百済（くだら）から五経博士（ごきょうはかせ）を招いたり、出兵をめぐ

って「磐井の乱」が起こったりと、朝鮮半島とさまざまな関わりを持っていたことが知られています。その治世の末年に九州で起こった「磐井の乱」は、九州を中心に大規模な争乱となりましたが、これをなんとか平定されます。しかし、朝鮮半島をめぐる争いが続くなか大王は亡くなられます。

３．継体朝の古墳について

（１）古墳時代と古墳

継体大王の活躍した時代は、考古学の区分でいうと古墳時代後期に当たります。古墳時代は、前方後円墳をはじめ、円墳や方墳といったさまざまな形の古墳が、南九州や東北地方の一部、北海道を除く全国各地に造られました。形以上に注意されるのが、その大きさです。先ごろ世界遺産に登録された百舌鳥・古市古墳群の仁徳天皇陵古墳（大山古墳）は墳丘長が486ｍにも達する巨大なものです。その一方で、芝山古墳群には直径が10ｍに満たない小さな円墳も存在しました。また、副葬品の内容も被葬者の政治的・社会的地位を示すものと考えられています。このように古墳には、それぞれの時代ごとに、その形と大きさ、副葬品の内容などによって区別される階層的な構造を示す役割があったと考えられています（図２、菅報告図５・６）。

最近の発掘調査成果に、この研究方法を援用して、どのような時代像が読み解けるか、検討してみるのがこのセミナーの大きな目的です。

（２）埋葬施設について

また、このころ古墳の埋葬施設にも大きな変化が起こります。新たに朝鮮半島から伝わった横穴式石室（図４）という新しい埋葬施設が導入されます。これは石材を積み上げて入り口を設けた石の部屋、石室を構築するものです。入り口は石材や土砂で閉じていましたが、新たに亡くなった人がいると入り口を開いて先に亡くなった人と同じ部屋に葬ります。同じ部屋に葬られるのは夫婦や親子など親族関係にある人々と考えられています。

横穴式石室のもっとも初期のものは北部九州で４世紀後半～末に出現しますが、近畿地方では５世紀後半に導入され、６世紀になると今城塚古墳などの大王墓をはじめ、各地の前方後円墳や円墳、方墳など多くの古墳に取り入れられます。

この横穴式石室の導入は、そのころ地域の有力者を中心に古墳の造営可能な階層が大きく広がったことと合わせて、横穴式石室が全国各地で造られるようになりました。

（３）古式群集墳と新式群集墳

古墳というと、前方後円墳をはじめとする巨大な古墳の姿が思い浮かびますが、実際には一辺ないし直径が20ｍ以下、あるいは10ｍ前後の小規模な古墳がたくさん築造されてい

ます。これら小規模な古墳は、10基前後から多ければ100基以上まとまって築造されることが多くなることから「群集墳（ぐんしゅうふん）」と呼ばれています。

この「群集墳」は、先に述べた横穴式石室が採用されると爆発的と言って良いほど数が増えます。この横穴式石室を埋葬施設とする群集墳を「新式群集墳」と呼びます。これに対して、横穴式石室が導入される前の群集墳の多くは、木棺や石棺を直接地面に埋めるような埋葬葬法をとっていました。このような群集墳を「古式群集墳」と呼びます。

４．おわりに

ここに紹介した「古式群集墳」「新式群集墳」という区分も大事なキーワードです。この２種類の「群集墳」はその名が示すような新旧の意味ではなく、「古い様式」「新しい様式」という意味で、現在でもそうであるように、同時に存在するものです。

こうした２種類の「群集墳」の被葬者像は、どのようものであるのか、それが今回のセミナーの大きなテーマとなります。２種類の「群集墳」の違いはどのような意味を持つのか、被葬者は地域でどのような立場にあったのか、それをこのセミナーで明らかにしたいと思います。

表１　継体大王関連年表

天皇	西暦	記事	
武烈元年	500	武烈大王が即位する	
武烈８年	506	武烈大王が没する	
継体元年	507	継体大王が河内の樟葉宮（大阪府枚方市と推定）で即位する	
継体５年	511	都を山背の筒城（京都府京田辺市と推定）に遷す	
継体６年	512	百済に任那四県を割譲する	★
継体７年	513	百済が五経博士を貢る、百済に任那の地さらに割譲する	★
継体８年	514	伴跛国が築城して倭国に備える	★
継体９年	515	朝鮮半島へ出兵するが伴跛国に敗れる	★
継体 10 年	516	百済が五経博士段楊爾に代えて漢高安茂を貢る	★
継体 12 年	518	都を山背の弟国（京都府長岡京市周辺と推定）に遷す	
継体 17 年	523	百済の武寧王が没する	★
継体 18 年	524	百済の聖明王が即位する	★
継体 20 年	526	都を大和の磐余（奈良県桜井市周辺と推定）に遷す	
継体 21 年	527	磐井の乱が起きる	
継体 22 年	528	磐井の乱を平定する	
継体 23 年	529	朝鮮半島へ出兵する	★
継体 25 年	531	継体大王が没する、一説に安閑大王が即位する	
	532	新羅が金官国を併合する	★
安閑元年	534	安閑大王が即位する	
宣化元年	536	宣化大王が即位する	
宣化３年	538	仏教公伝（元興寺縁起等の説）	
欽明元年	540	欽明大王が即位する	
欽明 13 年	552	仏教公伝（日本書紀の説）	
欽明 23 年	562	新羅が任那（伽耶諸国）を併合する	★

※『日本書紀』『元興寺縁起』等を参考に作成　★は朝鮮半島に関する記事

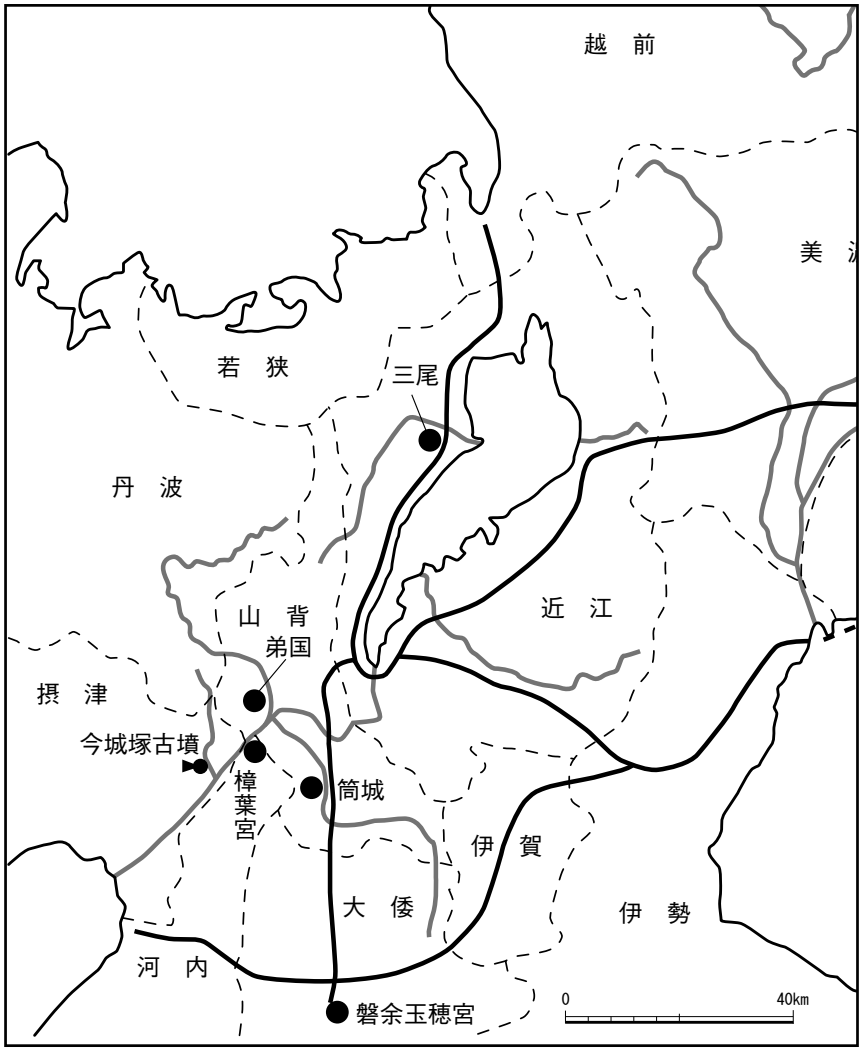


図１　継体大王関係図

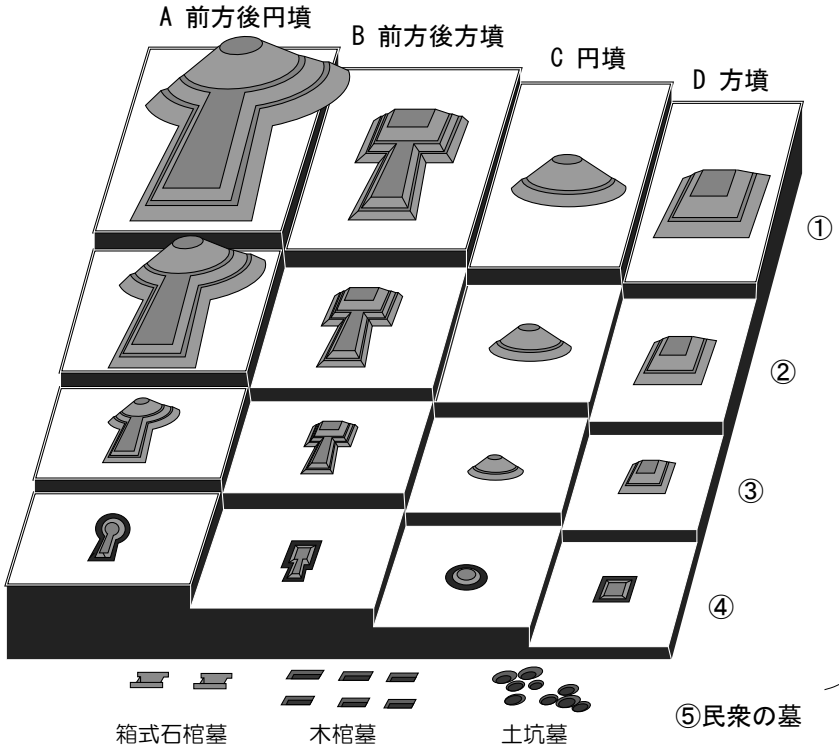


図２　古墳の階層性

（都出比呂志編『古墳時代の王と民衆』古代史復元６に加筆）

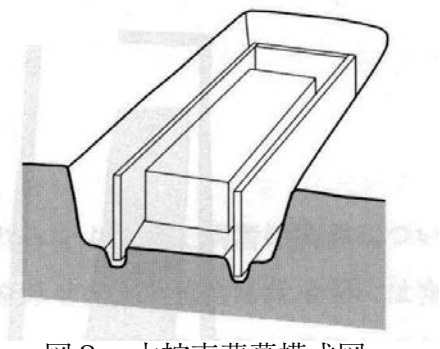


図３　木棺直葬墓模式図

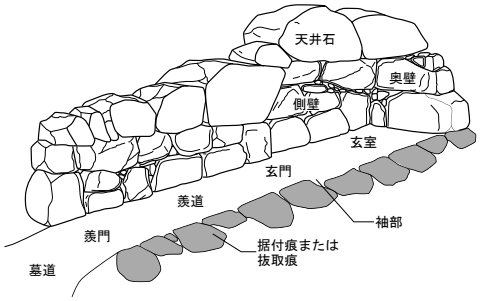


図４　横穴式石室模式図

（『発掘調査のてびき』に加筆）

京埋セミナー資料 No.142 － 437

京都府南部の墓制
―城陽市芝山古墳群の調査成果を中心に―

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
菅　博絵

１．はじめに

宇治川・桂・木津川が形成する淀川流域には、古墳時代になると桂川右岸域に乙訓古墳群、木津川右岸域に久津川古墳群、淀川北岸域に三島古墳群と大規模な古墳群が造られます。芝山古墳群は、その中の１つである久津川古墳群を構成する古墳群と考える説もあります（和田1988、小泉2005）。本報告では、京都府南部の山城地域の古墳時代後期の墓制について考えていきたいと思います。

２．京都府南部の古墳の様相

京都府南部の木津川流域では、古墳時代前期前半に木津川上流域に椿井大塚山古墳（前方後円墳、全長175m）が造られ、古墳時代前期後半には各地に前方後円墳が造られるようになります（図２）。木津川右岸では、広野地域の一本松古墳（方墳、一辺28m）を契機として庵寺山古墳（円墳、径56m）、久世地域の西山１号墳（前方後方墳、全長82m）、富野地域の梅の子塚１号墳（前方後円墳、全長87m）、木津川左岸の八幡地域では茶臼山古墳（前方後方墳、全長50m）が有力首長の古墳として丘陵上に造られるようになります。この時期は、墳形、埴輪や葺石などの外表施設、埋葬施設などにおいてそれぞれ特色を持った古墳が造られていたと考えられています。

古墳時代中期前半になると前期まで中型古墳が造られていた広野・富野・木津川右岸の木津地域では古墳が造られなくなり、綴喜郡西部（八幡・大住・田辺）で中型の前方後円墳や円墳が造られる程度になります。一方、久世地域の大谷川扇状地では、大型の前方後円墳を中心とした古墳群が造られます。古墳の形状、規模などに規制が働き、大型の前方後円墳を頂点とする政治秩序に組み込まれます。一部の古墳で竪穴式石槨（箱塚古墳、梶塚古墳）、長持形石棺直葬（車塚古墳）を採用しますが、多くは木棺を粘土で覆った粘土槨や墓壙に直接木棺を配置する木棺直葬を採用します。

古墳時代中期後半になると、大型の前方後円墳が造られなくなり、中型の方墳、円墳が造られるようになります。また、木津川市上狛天竺堂１号墳や青谷地域の城陽市冑山１号墳など一部の古墳で横穴式石室が早期に採用されます。

古墳時代後期前半には、各地に中型の前方後円墳が造られるようになります。継体大王のお墓と考えられている今城塚古墳の造営勢力と連繋した有力者が前方後円墳を築くことができたと考えられています（梅本2012）。青谷・井手（いで）地域では、横穴式石室を持つ古墳が増加しますが、古墳時代中期に盛んに古墳が造られていた広野・久世・富野地域では、横穴式石室は採用されず、木棺直葬を採用し続ける傾向が見られ、中型の前方後円墳でも横穴式石室を採用せず（長池古墳、坊主山１号墳）、粘土槨や木棺直葬といった埋葬方法を継続して採用しています。この時期は、中期まで造られていた方墳が徐々に姿を消し、中小規模の円墳が増加して古式群集墳を形成します。大型前方後円墳が造られなくなり、木津川右岸域一帯に中型の前方後円墳が造られることから、広域を治めていた首長層が衰退し、新たに台頭した小地域を治める首長層や地域有力者は直接的に王権の政治体制に組み込まれていったと考えられます。

古墳時代後期後半には、横穴式石室を埋葬施設とする小型の円墳からなる新式群集墳が中期に古墳が造られなかった青谷・井手・木津川右岸の木津地域に急増します。また綴喜郡においては丘陵斜面に横穴を掘って墓とする横穴墓が造られるようになります。一方、久世地域では、古墳時代後期になると古墳が造られなくなり、横穴式石室を採用する古墳群（上大谷17・12・14号墳）は後期末になり出現します。

３．長年造られ続けた古墳～芝山古墳群～

芝山古墳群では、前期後半の前方後円墳である梅の子塚１号墳（全長87ｍ）・２号墳（全長65ｍ）の築造を契機に古墳群が形成されます。その後、古墳時代後期に至るまで古墳が造られ続け、現在32基の古墳が見つかっています。芝山古墳群は、立地によってⅠ～Ⅳ群に分けられます（図４）。以下、時期ごとに古墳の変遷をみていきます。

（１）古墳時代前期～古墳時代中期初頭

現在３基の古墳が見つかっています。古墳時代前期後半に芝山古墳群がある芝山丘陵の標高50ｍ付近に梅の子塚古墳群が築造され、その南東側に一辺10ｍ前後の方墳が造られます（Ⅳ群－１～３）。埋葬施設は、木棺直葬で、木棺の小口や周辺を粘土で押さえています。副葬品は棺内に鏡や勾玉、管玉、鉄刀などが納められます。埴輪棺を伴うことも特徴です。

（２）古墳時代中期前半～後半

現在15基の古墳が見つかっています。古墳時代中期前半になると梅の子塚古墳群の北東側に小型の方墳（Ⅱ群－１～４）が、東側の丘陵から20ｍ低い丘陵平坦面に中型の方墳（Ⅲ群－１・２、Ⅰ群－１・２）が造られます。埋葬施設は削平されているため詳細は不明ですが、鏃（やじり）や農工具などが副葬されます。周溝内から甕や、杯・高杯などの食器類が多く出

土します。

この時期は大中型の古墳が王権の秩序のもとに造られていると考えられ（和田2018）、それ以外の地域有力者は弥生時代の墓制を引き継いだ古墳を築造しています。芝山古墳群のⅡ群の被葬者は、富野地区を経済基盤とする地域有力者であったと考えられます。

古墳時代中期後半になると丘陵平坦面に墳丘をほとんど持たない小型の低位墳丘の方墳と新たに墳丘を持つ中型の円墳が集中して造られるようになります（Ⅰ群－３・４・11・15・21～23）。埋葬施設は、現在判明している古墳では木棺直葬であり、棺内には食器や壺などの容器類が副葬されます。周溝内からは、食器類のほかに容器類が出土するようになります。

古墳時代中期になると南山城では、大型前方後円墳を頂点とする政治秩序に組み込まれていきます。和田晴吾氏が分類した古墳時代中期の階層（和田2018）において久津川古墳群は、箱塚古墳･車塚古墳･芭蕉塚（ばしょうづか）古墳を頂点とし、地域支配を行うＢ類に該当します（図５）。芝山古墳群はその末端に位置すると考えられます。

（３）古墳時代中期末～後期

現在９基の古墳が見つかっています。古墳時代後期前半になると、小型の方墳が造られなくなり、小型の低位墳丘の円墳と中型の墳丘を持つ円墳が造られるようになります（Ⅰ群－５・６・12・13・18・19）。埋葬施設は、中期に引き続き木棺直葬であり、棺内に食器類や容器などを副葬します。

大型前方後円墳を頂点とする政治秩序が崩壊し、王権の地域支配がより直接的なものになると古墳築造に規制が働き、芝山古墳群においても方墳が円墳化したと考えられます。

古墳時代後期後半になると、小型の円墳のみが造られるようになります（Ⅰ群－７～９、17）。周辺の青谷・井手・木津川左岸の木津地域では横穴式石室を持つ新式群集墳が増加しますが、芝山古墳群では埋葬施設は木棺直葬を継続し、後期前半まで棺内に納められていた副葬品が棺外に配置されるようになります。副葬品の中に鉄製品をもつ古墳があり、新納泉氏の群集墳被葬者の階層（新納1983）に当てはめると鉄鏃と鉄刀をもつ階層が埋葬されていると考えられます（図６）。

（４）小結

芝山古墳群の特徴として、①芝山丘陵という範囲に古墳時代前期から後期にかけて継続して古墳が造られる、②同一古墳群内で副葬品の組成・副葬位置の変化を追える、③中期後半に中型の円墳が造られるようになるが、後期後半には小型の円墳のみを造るようになる、④横穴式石室が普及した後も木棺直葬による埋葬を継続し続けることが挙げられます。

芝山古墳群は造墓活動に２回の画期が見られます。第１の画期は古墳時代中期後半で、丘陵上部に造られていた古墳が丘陵平坦部へ移動した時期です。王権の地域支配が進み、政治秩序のなかに組み込まれた段階になると、墓域が丘陵平坦部へ移動し、小型方墳のほかに中型の円墳も造られるようになったと考えられます。

第２の画期は古墳時代後期後半で、副葬品の配置場所が棺内から棺外へと変化した時期です。この時期に南山城地域では、横穴式石室からなる新式群集墳が増加します。芝山古墳群の葬送儀礼も横穴式石室が普及した影響をうけて変化したと考えられます。

竪穴式石槨や木棺直葬といった竪穴系埋葬施設の葬送儀礼では、墓壙を掘り、棺底・側板の設置まで終えた埋葬施設に遺体・副葬品を納め、棺蓋を閉じて墓壙を埋めます。古墳の構築と納棺・埋納儀礼が一体となっていることに対し、横穴式石室や横穴墓などの横穴系埋葬施設の葬送儀礼では、石室、墳丘が完成した後に納棺・埋納儀礼が行われます。古墳の築造と納棺･埋納儀礼が切り離され、祭祀のあり方が変化したと考えられています(和田1995)。

芝山古墳群では木棺直葬といった竪穴系埋葬施設を採用していても、横穴系埋葬施設の影響を受けたことにより副葬品を棺外に配置するいう変化が起こった可能性が考えられます。

５．おわりに

芝山古墳群では、木棺直葬という伝統的埋葬方法を継続していますが、その時々の政治的影響を受けて墓制が変化していく様子がうかがえます。芝山古墳群は、古墳時代の葬送儀礼の変化や王権の地域進出を解明するうえで重要な古墳群といえます。

《参考文献》

梅本康弘2012「２畿内の展開　③摂津・山城」『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学２　同成社

桐井理揮2019「古墳時代のお葬式―芝山遺跡からみた古墳時代の葬送儀礼―」第４回文化財連続講座資料　京都府立山城郷土資料館

小泉裕司2005「久津川古墳群の範囲と構成の再検討」『龍谷大学考古学論集』Ⅰ　龍谷大学考古学論集刊行会

新納泉1983「装飾大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻　第３号

和田清吾1988「南山城湖古墳－その概要と現状－」『京都市域研究Vol.4」立命館大学人文科学研究所

同1995「棺と古墳祭祀－「据え付ける棺」と持ち運ぶ棺」『立命館文学』第542号　立命館大学人文学会

同2018『古墳時代の王権と集団関係』吉川弘文館

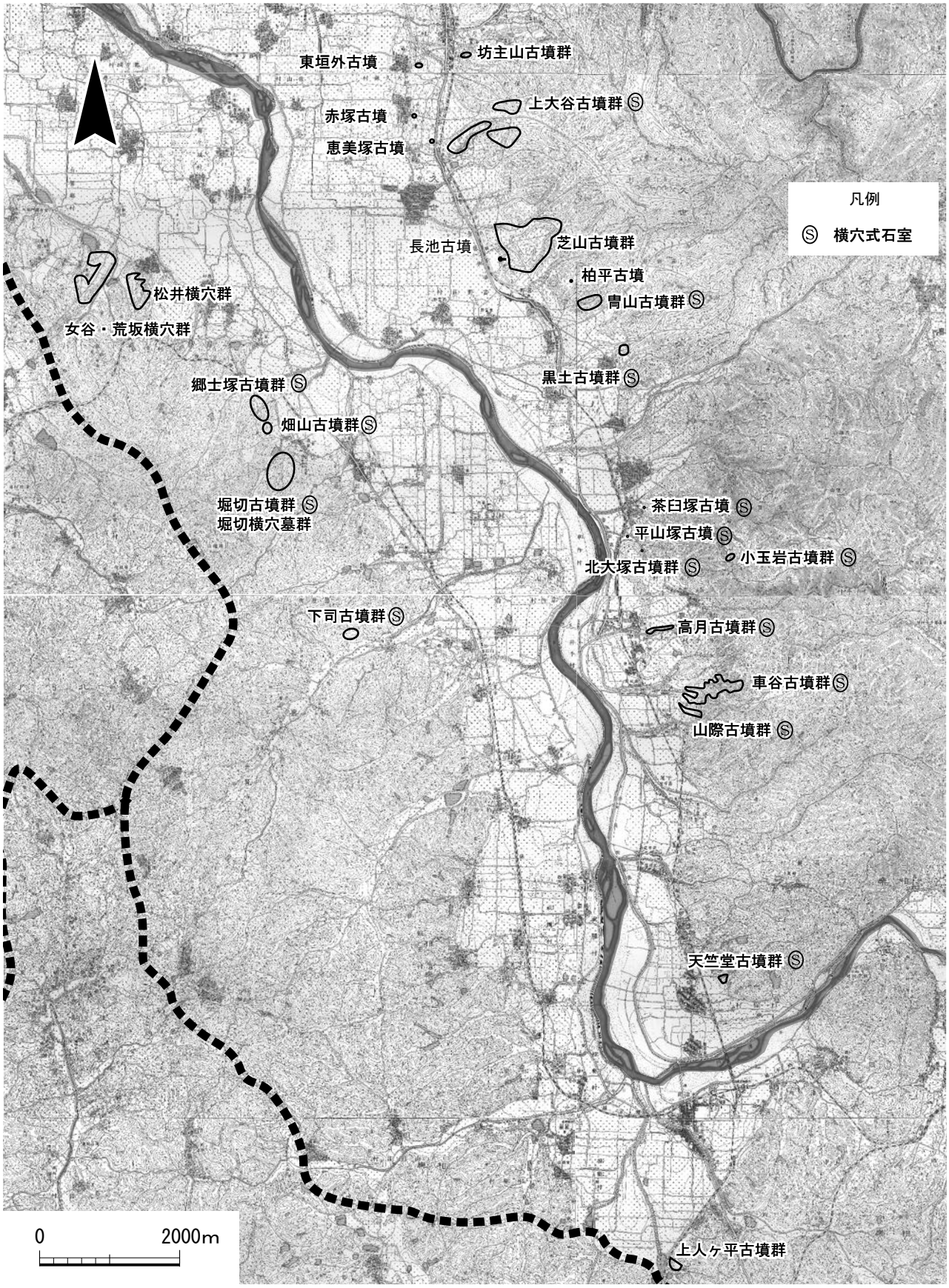


図１　南山城の中期末から後期の群集墳位置図(1/80,000)

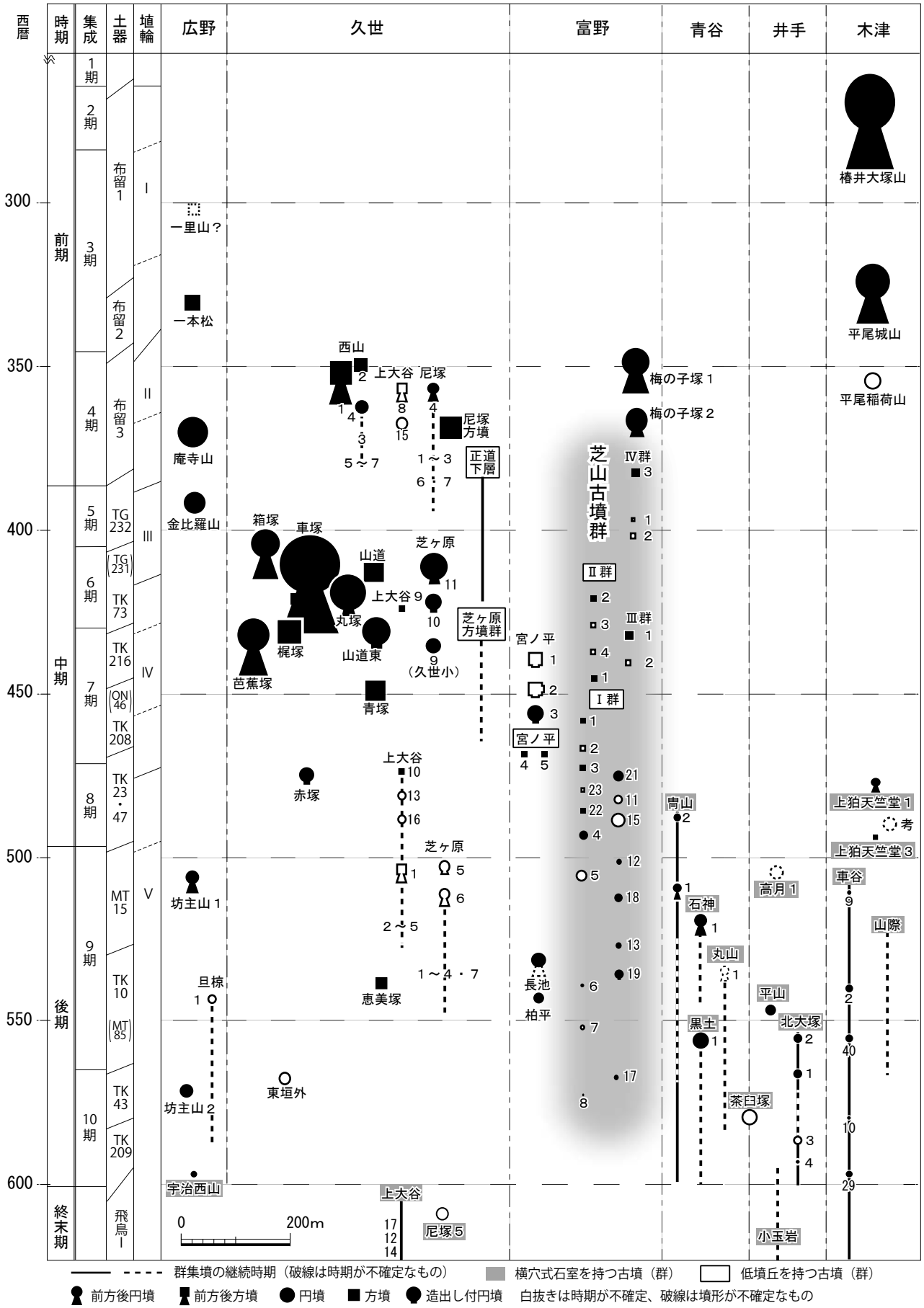


図２　木津川右岸域の古墳編年図（桐井2019一部改変）

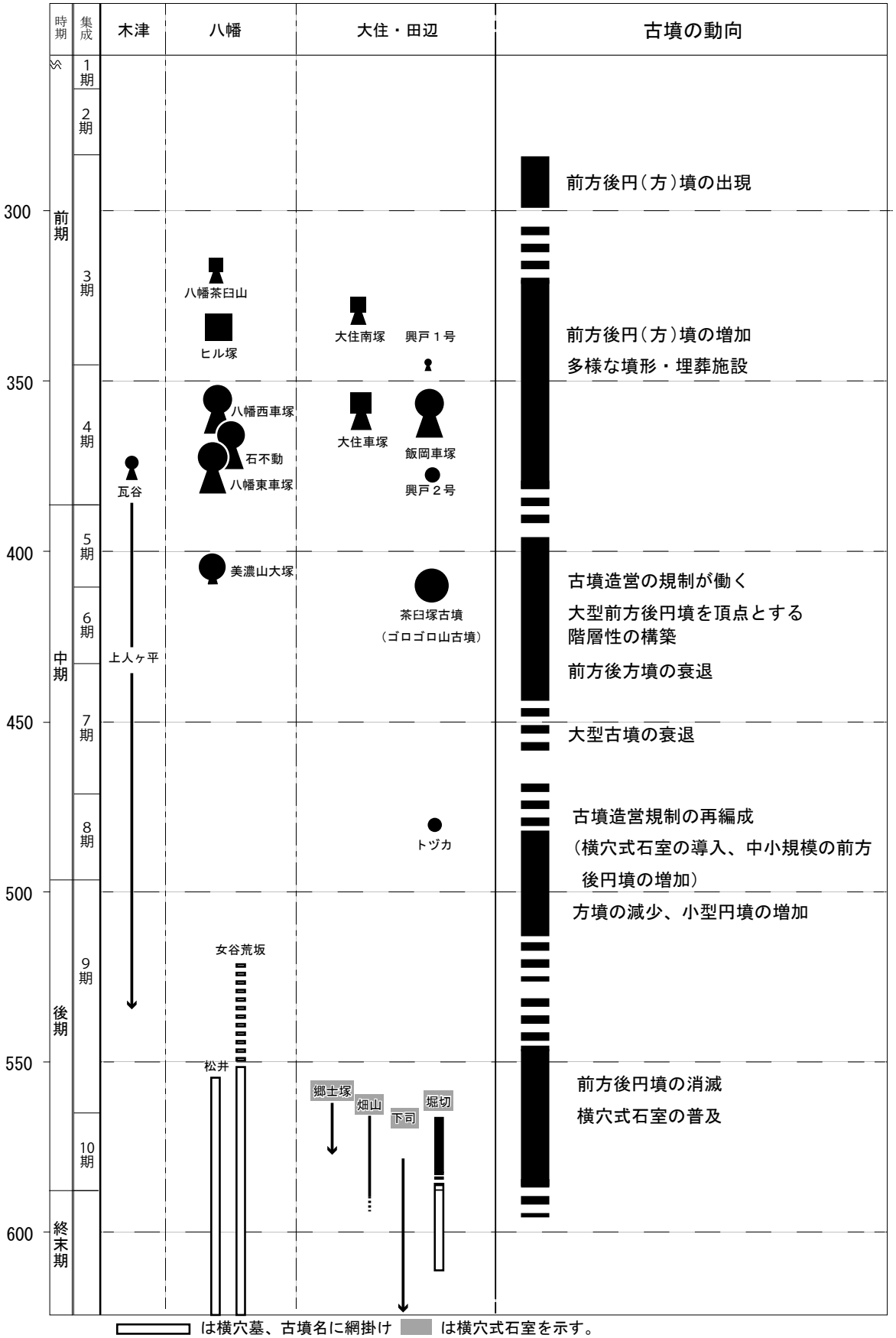


図３　木津川左岸域の古墳編年図

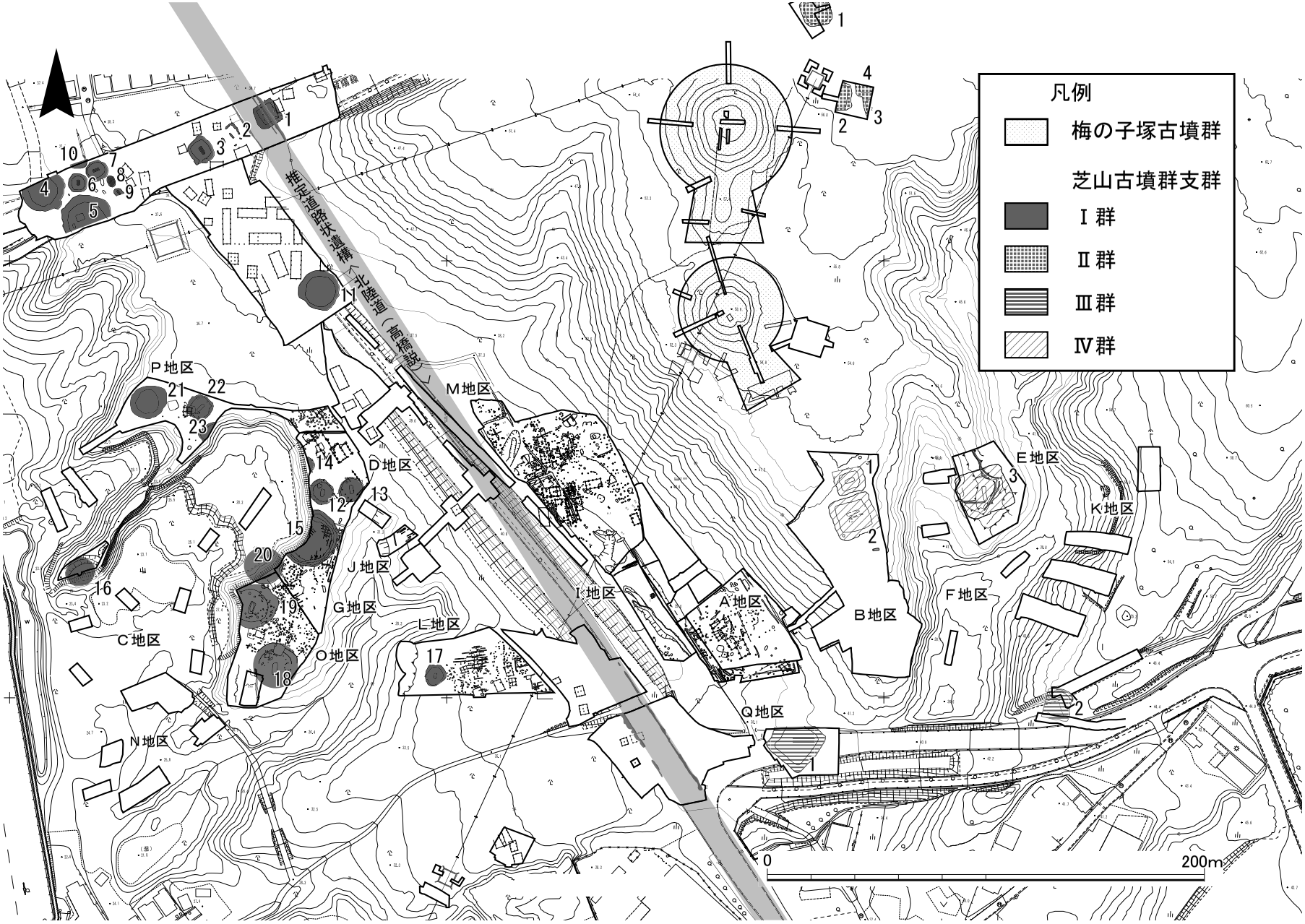


図４　芝山古墳群の分布図(1/2,500)

表１　芝山古墳群の副葬品配置場所一覧（桐井2019を改変）

古墳名	時期	墳形	規模（m）	土器の供献				副葬品			埴輪
				周溝内	棺内	棺外		棺内	棺外	原位置不明	
						棺小口	棺蓋上				
梅の子塚１	前期後半	前方後円	87	—							円筒・朝顔
梅の子塚２		前方後円	65	—							円筒・朝顔
芝山 Ⅳ－１	前期末	方	9								（埴輪棺）
芝山 Ⅳ－２		方	13					鏡・玉			（埴輪棺）
芝山 Ⅳ－３		方	ー					鉄刀			壺
芝山 Ⅲ－１	中期前半	方	17							鏃・鎌など	円筒・形象
芝山 Ⅱ－２		方	11	▲	削平						
芝山 Ⅱ－３		方	ー		削平						
芝山 Ⅱ－４		方	ー	■	削平						
芝山 Ⅱ－１		方	11	■ ▲	削平					銀環	
芝山 Ⅰ－１		方	10	■ ▲	削平					鉄斧	
芝山 Ⅰ－２		方	8		削平						
芝山 Ⅰ－３	中期後半	方	11	▲ ●	▲ ●						
芝山 Ⅰ－23		方	9		削平						
芝山 Ⅰ－22		方	10	▲	●						
芝山 Ⅰ－21		円	17	▲ ●							
芝山 Ⅰ－４		円	17.4	■ ▲ ●	削平						
芝山 Ⅰ－12	後期前半	円	11		▲ ●			刀			
芝山 Ⅰ－５		円	20		削平					鎌	
芝山 Ⅰ－18		円	19		▲ ●			鏃、斧			
芝山 Ⅰ－13		円	11.5		▲ ●						
芝山 Ⅰ－６		円	7.5		▲ ●						
芝山 Ⅰ－19		前方後円？	20 ？		▲ ☆		○ ▲ ●	刀、玉	槍、鏃（棺上）		
芝山 Ⅰ－７	後期後半	円	8.1			●			刀子（棺上）		
芝山 土壙墓２		—	ー	—		●					
芝山 土壙墓４		—	ー	—			▲ ●				
芝山 Ⅰ－８		楕円	3.2 ～ 5			●	▲				
芝山 Ⅰ－17		円	9.5			●	▲		鏃（棺側）		
芝山 Ⅰ－９		楕円	不明			□ ●					
芝山 土壙墓５		—	ー	—	▲ ○						
芝山 Ⅰ－10	ー	円	ー		削平						
芝山 Ⅰ－11	中期	円	16		削平						
芝山 Ⅰ－14	ー	円	ー		削平						
芝山 Ⅰ－15	中期	円	26.7		削平						
芝山 Ⅰ－16	ー	円	ー		削平						
芝山 Ⅰ－20	ー	円	ー		削平						

須恵器　■甕　▲杯・蓋・高杯など食器類　●壺・はそうなど容器類
土師器　□甕　○壺など容器類　☆その他

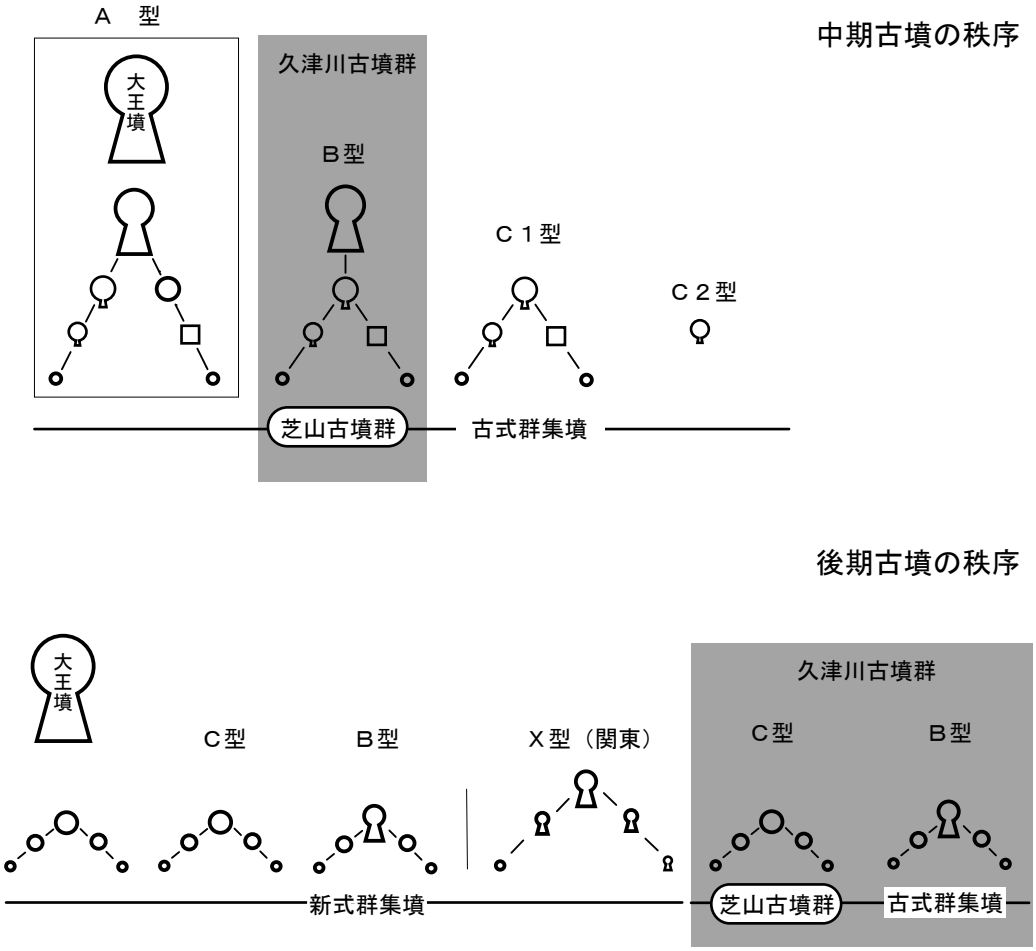


図５　古墳時代中期・後期の階層（和田2018を基に作成一部加筆）

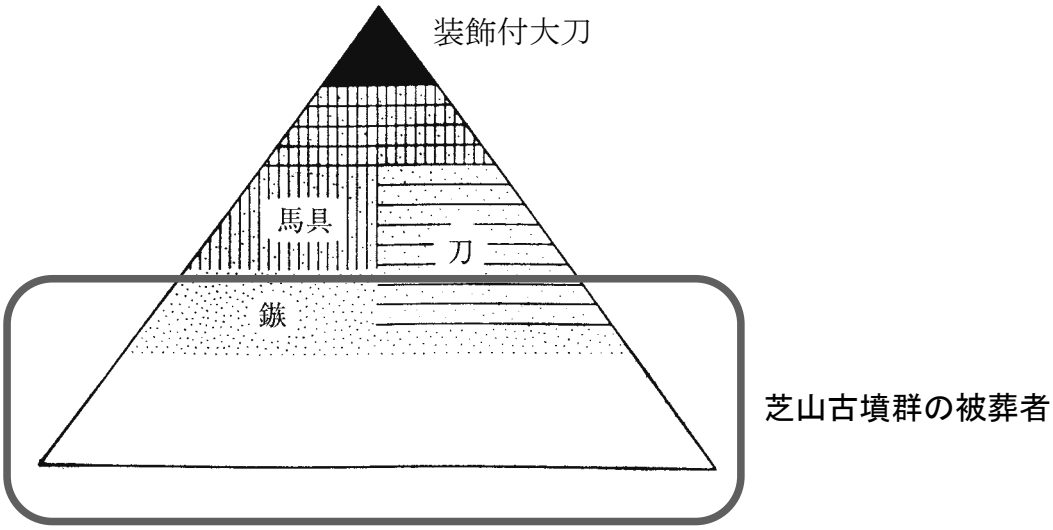


図６　副葬品から見た群集墳被葬者の階層（新納1983に一部加筆）

京埋セミナー資料 No.142 － 438

古墳時代後期の墓制
－近江の継体朝を中心に－

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
堀　真人

１．はじめに

継体大王は、近江国高嶋郷三尾野（現在の滋賀県高島市近辺）で誕生したといわれ、近江出身の妃を娶っていることからも、近江が有力な勢力基盤の一つであったことは間違いありません。

考古学的な観点からみると継体朝の近江は、埋葬施設として横穴式石室が次々と導入される時期となります（図１）。有力古墳には湖西地域に鴨稲荷山古墳、湖南地域に国分大塚古墳、円山・甲山古墳、湖北地域に山津照神社古墳があります。これらの古墳はヤマト王権との関係が想定される古墳と考えられ、墳丘規模や副葬品の内容、使われた石棺からもその点は肯定できるでしょう。

２．近江の継体朝の古墳を考える

近江における継体朝の古墳の状況を概観するにあたり、資料的な制約があることを考えておく必要があります。古墳の内容（墳丘規模・形態、埋葬施設、副葬品）等を知ろうとすると発掘調査が不可欠となります。しかし、発掘調査は平地部が多く、比較的遺存状態の良い丘陵部の例が少ない状況です。平地部でみつかる古墳は、墳丘が削平され、埋葬施設が消滅していることが多く、そのような場合は、可能性の話はできますが、詳細については不明としか言えない場合が多いのです。そこでここでは限界があることを前提として、調査事例がある程度蓄積されている地域を検討することで、与えられたテーマに寄与することとしたいと思います。

３．湖西北部地域の古墳の動向（図２）

湖西地域は、地勢的に南北に分けることができます。現在の大津市域（南部）と高島市域（北部）です。ここでは、湖西北部（高島市域）を対象とします。

湖西北部の地形　湖西地域は琵琶湖に山地が迫り全体的に平野の発達が乏しい地域ですが、北部の高島市域は比較的まとまった平野が発達しています。南側に比良山地、北側に

野坂山地が位置し、その間を南から鴨川、安曇川、石田川、知内川が流れており、沖積平野を形成しています。また、安曇川と石田川の間には饗庭野台地が広がり、高島地域をさらに２分しています。

湖西北部の古墳時代　湖西北部地域は、前期段階の古墳があまり目立たない地域です。数少ない前期古墳を含む古墳群は、安曇川左岸の熊野本古墳群と石田川左岸の妙見山古墳群です。熊野本古墳群は38基からなる古墳群で、前方後方墳（６号墳：全長30m）、前方後円墳（12号墳：全長31m）が調査されており３世紀代に築造を開始します。以降中期に石田川左岸に平ヶ崎王塚古墳、安曇川右岸に田中王塚古墳が築かれます。それぞれの古墳の周囲には後期段階の小規模な古墳が多数築かれていることが確認されています。後期初頭に拝戸古墳群内に横穴式石室が導入されます。畿内型初期横穴式石室で、近江において最も早い導入例です。そして６世紀前半に鴨稲荷山古墳が鴨川左岸の平野部に築かれます。鴨稲荷山古墳は全長が約50mの前方後円墳に復元され、埋葬施設は横穴式石室、二上山産凝灰岩製の家形石棺を安置しています。棺内からは金製垂飾付耳飾や金銅製冠、金銅製飾履、金銅製双龍文環頭太刀柄頭などの副葬品がみつかっています。ヤマト王権とのつながりが想定される卓越した副葬品の内容です。しかし、この鴨稲荷山古墳以降、これに続く首長墓はみあたりません。この鴨稲荷山古墳と同時期に造られたのが知内川右岸に位置する北牧野古墳群中の斎頼塚古墳です（円墳：15m）。埋葬施設の横穴式石室には石棚が架構されており、九州とのつながりが想定されます。この斎頼塚古墳の築造を契機として、北牧野古墳群の築造が開始されます。隣接する西牧野古墳群と合わせると100基を超える湖西北部地域最大の後期群集墳です。

４．湖西北部地域の古墳群の調査

ここでは、発掘調査が実施され、規模、埋葬施設の様相、副葬品、時期が判明している古墳群を概観します。

（１）妙見山古墳群・王塚古墳群（図３）

妙見山古墳群と王塚古墳群は、石田川左岸の妙見山丘陵（妙見山古墳群）と北側に隣接する平地部（王塚古墳群）に位置します。

【妙見山古墳群】60基が確認されており、内23基が調査されています。３世紀代から７世紀後半まで築造されていたことが分かっています。墳丘は一辺７～15mの方墳もしくは、直径10～16mの円墳が主体で、埋葬施設は木棺直葬が中心です。副葬品も中期段階は少量の武具（刀・鏃）、工具（鉄斧・鉇）、装飾品（玉類）、後期は土器類が中心です。

【王塚古墳群】５世紀代に築造された直径56mの円墳である平ヶ崎王塚古墳を中心に、

その周辺に周溝から直径6～16mに復元できる円墳が20基確認されています。埋葬主体部が確認されている古墳では、木棺直葬であることが分かっています。調査された古墳は６世紀代の築造です。

（２）南畑古墳群・下平古墳群（図４）

安曇川左岸の饗庭野台地から派生する丘陵上から端部に下平古墳群、その下位段丘に南畑古墳群が位置します。

【南畑古墳群】発掘調査で14基の古墳が確認されています。時期は６世紀代で、墳丘が残っているものは直径10m前後の円墳で、埋葬施設は横穴式石室、竪穴系小石室、木棺直葬、土壙墓です。副葬品は少量の須恵器と装飾品（金銅製耳環）が目立ちます。

【下平古墳群】発掘調査で23基が確認されています。時期は５世紀代から７世紀前半代までで、直径10～23mの円墳が中心です。埋葬施設は５世紀代が木棺直葬、６世紀以降は横穴式石室、竪穴系小石室、木棺直葬と多様です。副葬品は、５世紀代は少量の鉄製品（刀子・鉄鏃・鉄刀）、６世紀以降は少量の須恵器が主体ですが、一部、馬具を持つ古墳があります。

５．湖西北部の古墳群からみえてくるもの（予察：図６－１）

以下の基準で古墳群を分類します。

①古墳群の築造期間

１類：古墳時代を通して造墓活動がある古墳群

２類：古墳時代の中期までで造墓を停止する古墳群

３類：古墳時代の中期から造墓を開始する古墳群

４類：古墳時代後期から造墓を開始する古墳群

②埋葬施設の構造

ａ類：木棺直葬系（木棺直葬・粘土槨）

ｂ類：木棺直葬系　⇒　石室系（横穴式石室・竪穴系小石室）

ｃ類：木棺直葬系　⇒　木棺直葬系・石室系

ｄ類：石室系

湖西北部の古墳群を上記の分類に当てはめると、田中古墳群・南畑/下平古墳群が３ｃ、熊野本古墳群が２ａ、妙見山古墳群が１ｂ、王塚古墳群が３ａ、酒波東古墳群・北牧野古墳群４ｄとなる。この中で妙見山古墳群は横穴式石室が導入されるのが７世紀中であることから、１ａと評価しておきます。

これらの分類結果は、１ｂ・２ａは地域首長の墓域として造墓が開始された古墳群（熊

野本古墳群・妙見山古墳群)、４ｄ(酒波東古墳群・北牧野古墳群)は典型的な後期群集墳であり、新たに墓域を設定した例と解釈できます。埋葬施設から考えると、ｄ類は横穴式石室という新式墓制であることから、導入をしない１ａ(妙見山古墳群)、３ａ(王塚古墳群)は前段階以来の伝統を保持していた集団であるとみることができます。これは石田川流域の限定的な特徴(図６)であるとの解釈も成り立ちますが、安曇川流域の平野部(上御殿遺跡：図６－２)で検出されている後期の古墳でも確認できることから、ａ類は湖西北部地域で広く共有されている墓制と理解し、在地の集団と考えておきます。そのように考えたとき、３ｃの田中古墳群・南畑/下平古墳群はどのように位置づけることができるでしょうか。つまり、後期段階で群内に多様な埋葬構造の古墳を造る古墳群をどのような集団と考えるかです。一案としては、在地系の集団＋αです。後期段階になっても木棺直葬系の埋葬施設を維持し続けながら、それに新式墓制を付加したと考えるのです。では、具体的に「α」にあたるのはどのような集団でしょうか。そのヒントは、田中36号墳にみられる特殊な石室構造(九州系)や南畑西地区１号墳で出土した棺釘と平底壺(渡来系)です。つまり、在地集団の中に外部から新たに編入された集団ではないかと想定することが穏当でないでしょうか。

６．おわりに

与えられたテーマに十分に応えられたか甚だ心もとないですが、近江の一地域(湖西北部)の古墳の動向から地域の集団関係を考えてみました。非常に雑駁な検討であり、今後の調査・研究の進展により当然、修正の必要が生じてくるでしょう。その時に議論の叩き台として役に立つものであれば幸いです。

《参考文献》

今津町1997『今津町史』第１巻　古代・中世

今津町2003『今津町史』第４巻　資料

今津町教育委員会1984「淡海地区遺跡群発掘調査概要報告書」『今津町文化財調査報告書』第３集

今津町教育委員会1995『日置前遺跡発掘調査概要報告書－王塚地区の調査』

今津町教育委員会1997『町内遺跡発掘調査概要報告書－弘部野南海道遺跡の調査・妙見山1号墳の調査』

今津町教育委員会1998『妙見山遺跡発掘調査概要報告』

今津町教育委員会2002『町内遺跡発掘調査概要報告書－日置前廃寺遺跡の調査・王塚古墳の調査』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1990『妙見山遺跡(妙見山古墳群)』一般国道161号(湖北バイパス)工事関係今津町内埋蔵文化財発掘調査報告書

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1991『高田館遺跡』一般国道161号（湖北バイパス）工事関係今津町内埋蔵文化財発掘調査報告書

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1995『日置前遺跡Ⅰ』一般国道161号（湖北バイパス）建設に伴う発掘調査報告書

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2003『北牧野古墳群』斧研川荒廃砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2008『酒波寺遺跡』県営農道整備事業に係る発掘調査報告書４

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2019『上御殿遺跡』鴨川補助広域基幹河川改修事業(青井川)に伴う発掘調査報告書３

新旭町役場1985『新旭町誌』

新旭町教育委員会2003『熊野本古墳群Ⅰ』新旭町文化財調査報告書第３集

新旭町教育委員会2004『熊野本古墳群Ⅱ』新旭町文化財調査報告書第６集

新旭町教育委員会2004『熊野本遺跡群保存活用基本構想』

高島市教育委員会2010『田中36号墳発掘調査報告書』

高島市教育委員会2018『南畑古墳群・下平古墳群発掘調査現地説明会資料』

高島市教育委員会2019『南畑古墳群・下平古墳群発掘調査報告書』高島市文化財報告書第34集

濱田耕作・梅原末治1923『近江国高島郡水尾村鴨の古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第８冊

マキノ町教育委員会・マキノ遺跡群調査団1998『斎頼塚古墳』

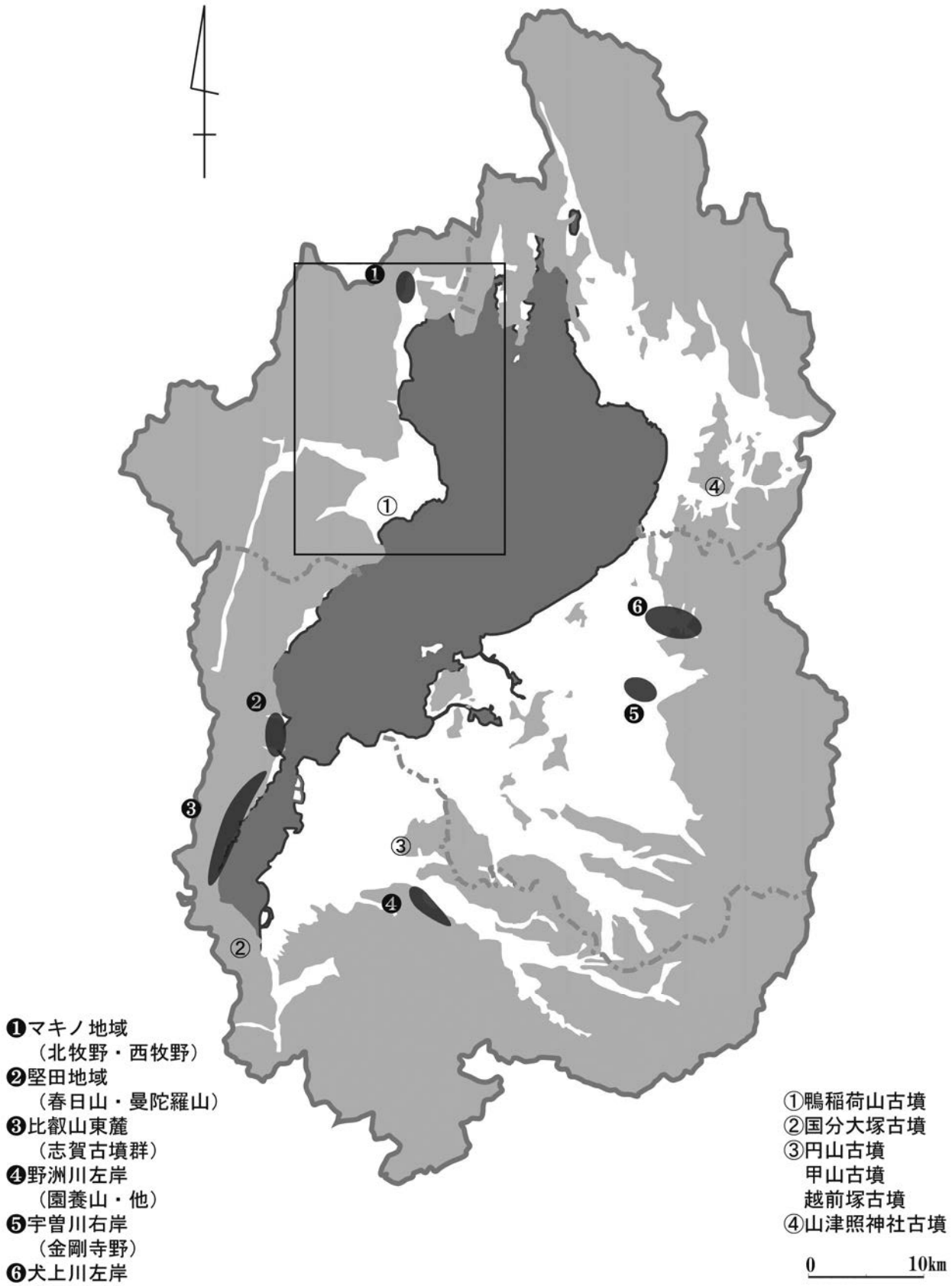


図１　継体朝期の主要古墳と大規模群集墳

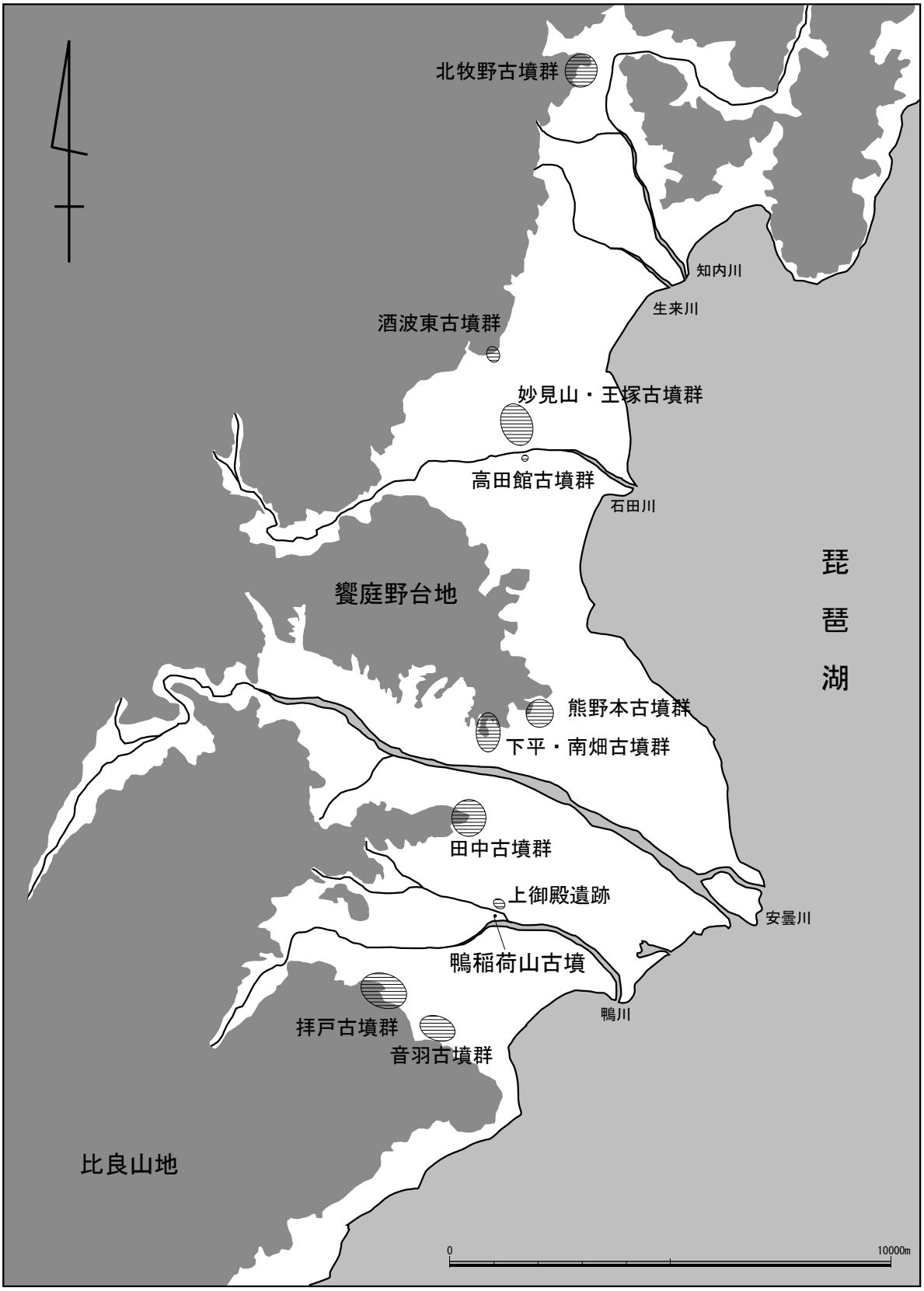


図２　湖西北部の古墳時代

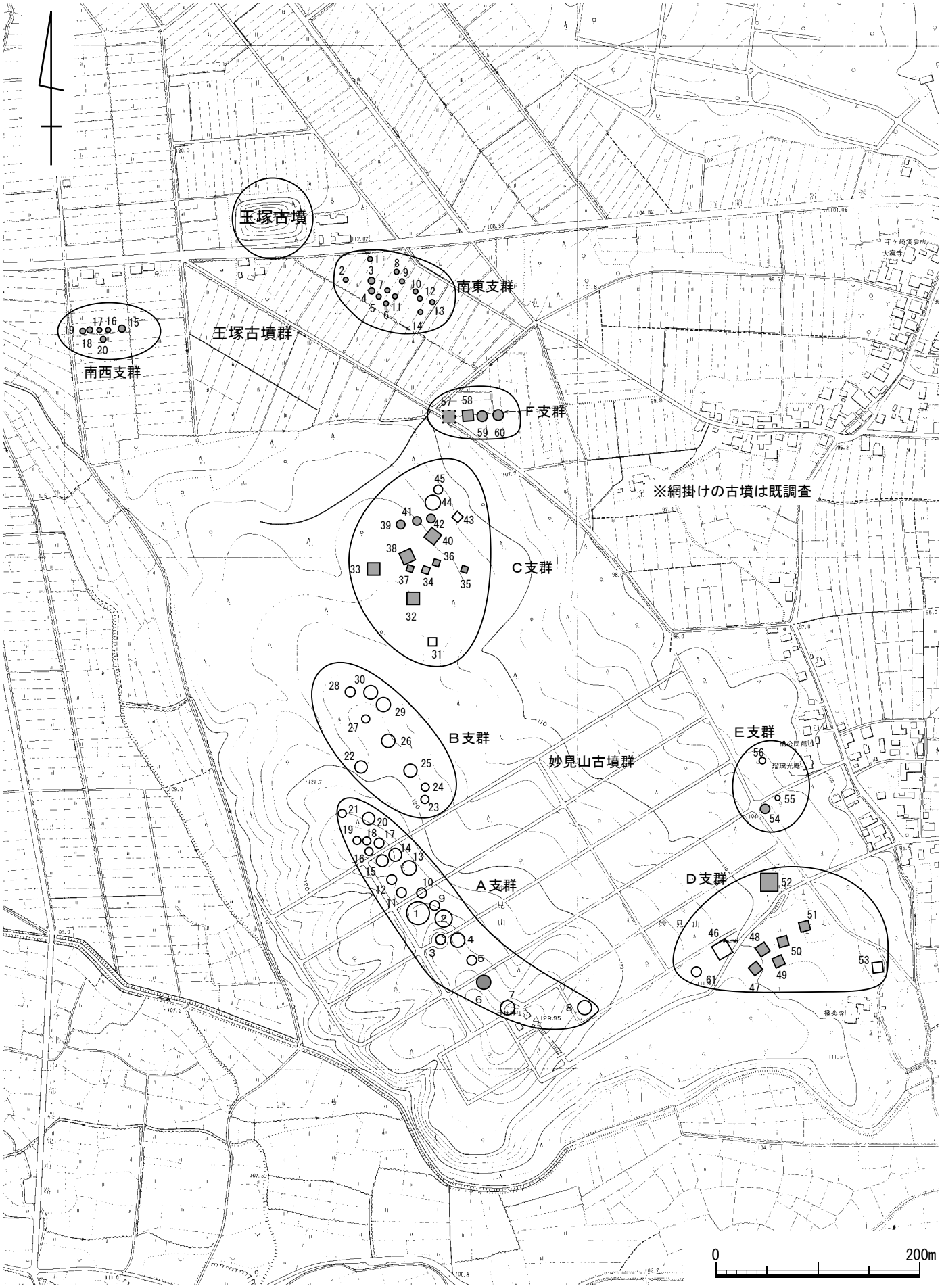


図３　妙見山・王塚古墳群分布

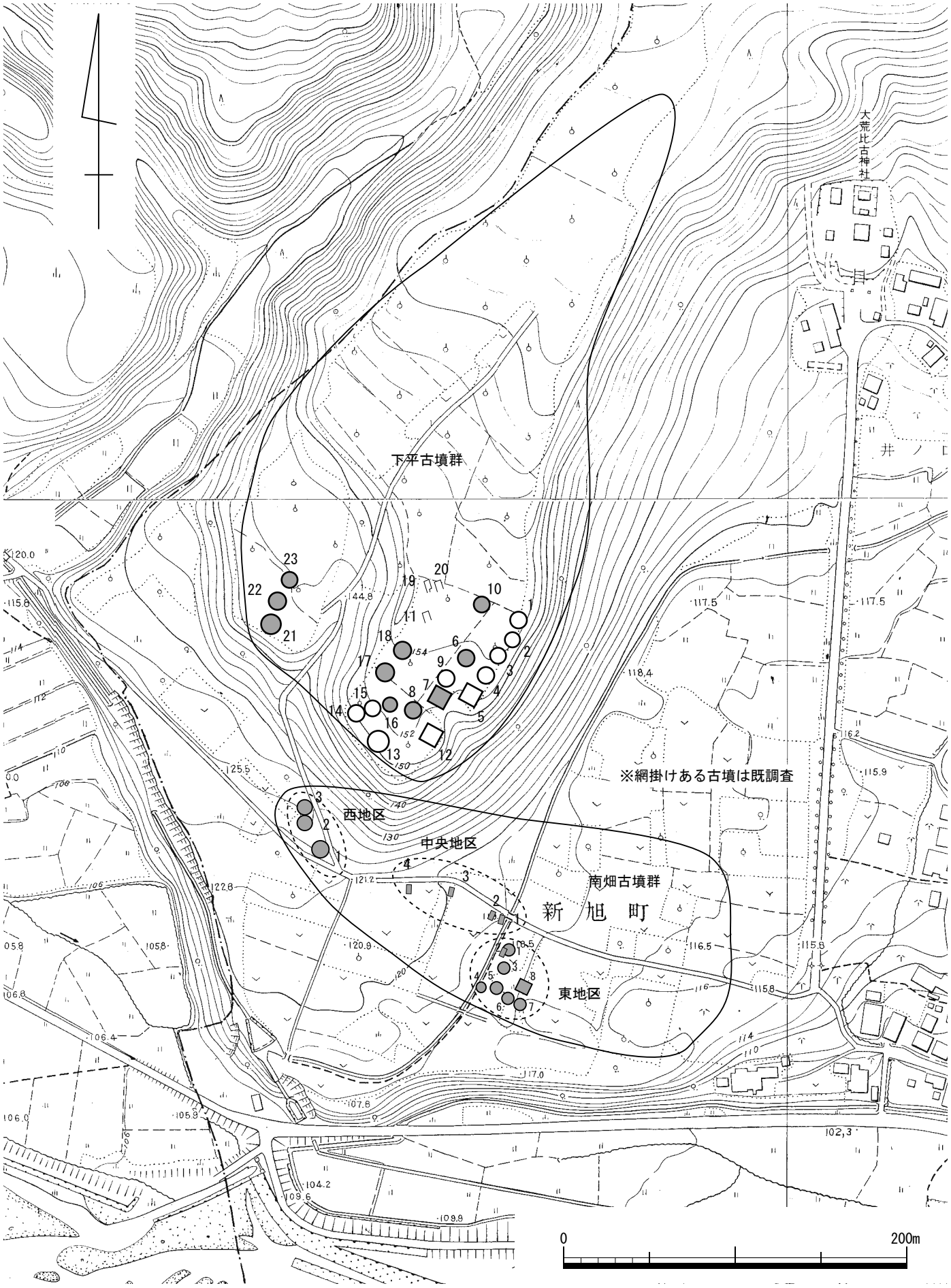


図４　南畑・下平古墳群分布

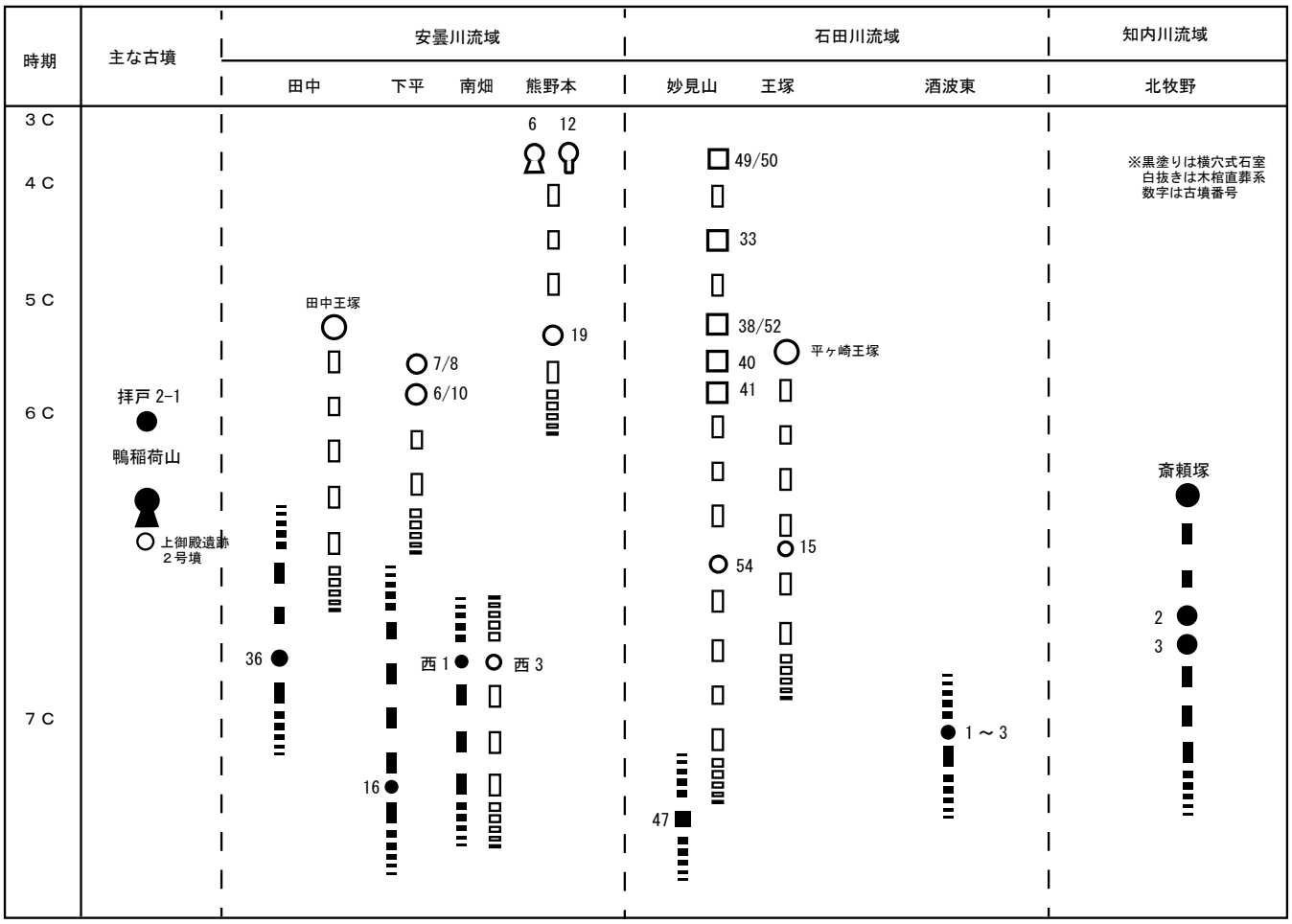
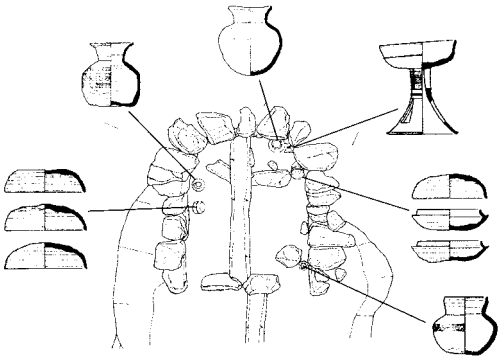
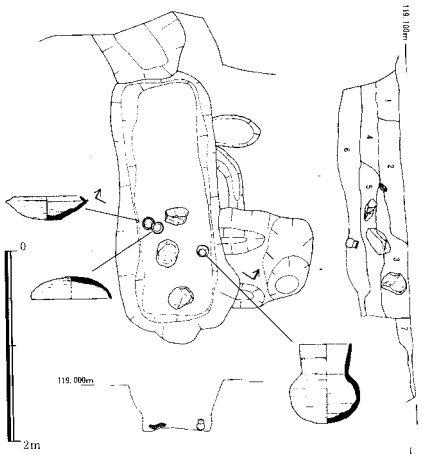


図５　湖西北部古墳群変遷

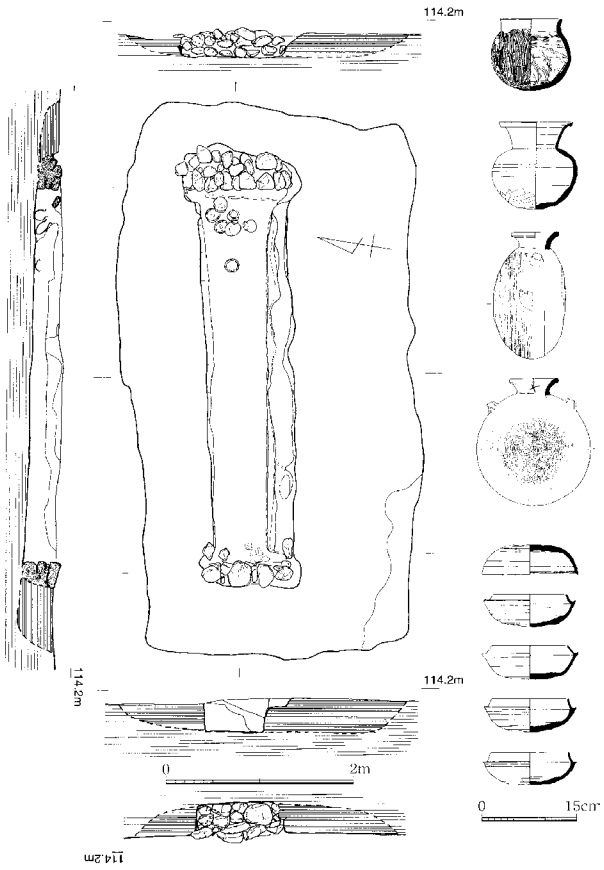


南畑西地区１号墳
（高島市教委 2019）

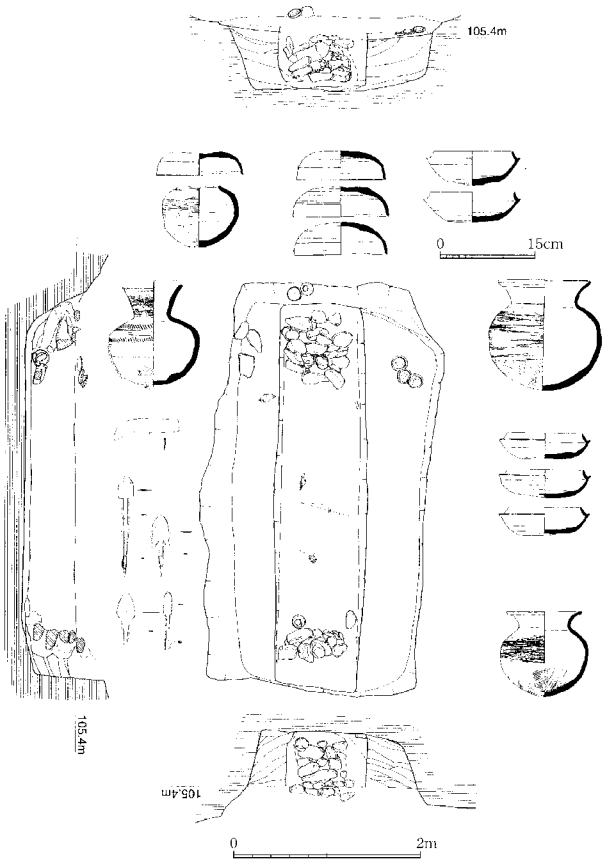


南畑中央区埋葬施設３
（高島市教委 2019）

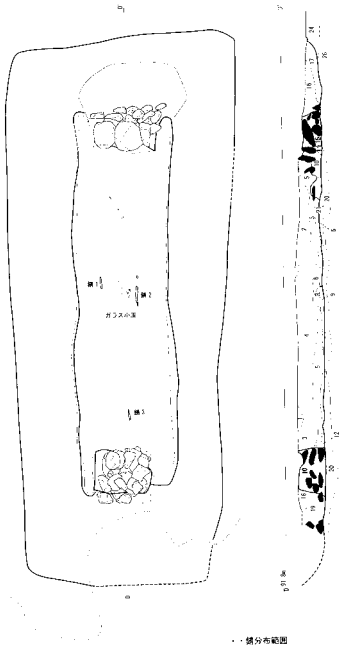
図６－１　湖西北部の主な古墳の埋葬施設と出土品１(1/80)



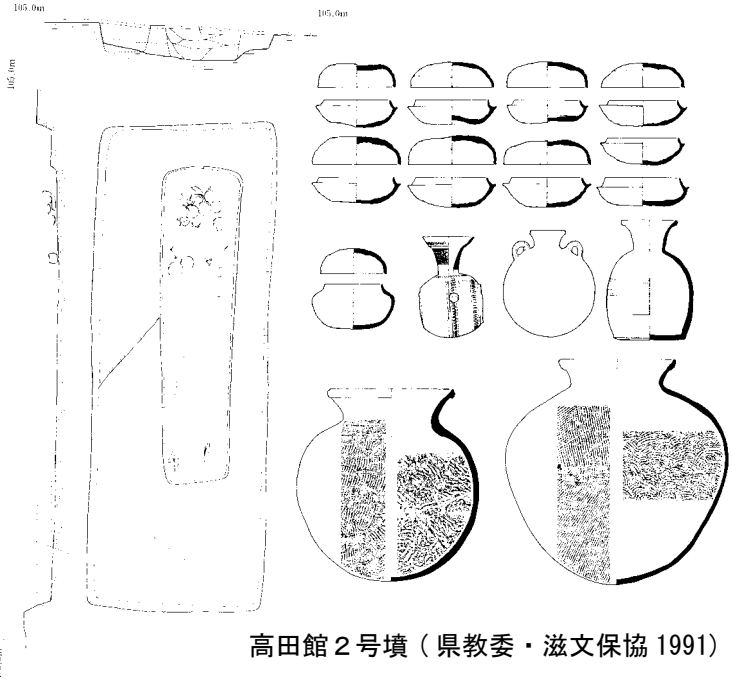
王塚 15 号墳（今津町 2003）



妙見山 E 支群 54 号墳（今津町 2003）



上御殿遺跡２号墳
（県教委・滋文保協 2019）



高田館２号墳（県教委・滋文保協 1991）

図６－２　湖西北部の主な古墳の埋葬施設と出土品２(1/80)

メ　モ

京埋セミナー資料 No.142 － 439

中小古墳からみた継体朝の摂津
－三島地域を中心に－

高槻市立今城塚古代歴史館
今西 康宏

１．はじめに

摂津三島は律令制下の摂津国島上郡、島下郡を指し、現在の高槻市、茨木市、摂津市、島本町、吹田市の一部などに相当します（図１）。淀川中流域の北岸に位置し、３世紀後半から７世紀後半までの大小約500基もの古墳が造営されました（図２）。その中心となるのは、三島最大の前方後円墳である太田茶臼山古墳と継体大王の墓と考えられる今城塚古墳という２つの巨大古墳です。

三島は地理的には、北の北摂山地から南の淀川へ幾筋もの河川が注ぎ、東西に小地域を形成しています。巨大古墳はその中央の芥川から安威川に挟まれた低位段丘の富田台地上に立地し、東側には郡家川西遺跡という古墳時代の大集落がありました。両古墳は三島という地域の階層構成を超えた規模と内容をもつ特異な存在ですが、その下には三島あるいは島上、島下の郡単位を治めた大首長墓がありました。例えば前期では弁天山古墳群、後期では南塚古墳や昼神車塚古墳などの前方後円墳がそれにあたります。その下には円墳や方墳からなる小地域を治める中・小の首長墓があり、さらに小型低方墳や群集墳として後期に伸長する有力家長層の墓があったと考えられます。なお、この最下部にムラの一般構成員の墓とみられる土壙墓などが位置します（和田1992　註１）。

大首長墓以上については年代などの議論を含めてその評価、首長相互の関係、あるいは出土品からみた他地域との関係など多くの検討がなされてきましたが、中小古墳については調査報告書での評価を除くと、中期の総持寺古墳群など限られたものしかありません。そこで三島に大王墓が築造されるなど大きな画期と考えられる継体朝（概ね６世紀前半）について、大王墓、大首長墓、中小古墳の順に整理し、相互の関係を検討したいと思います。

２．大王墓 今城塚古墳

今城塚古墳は富田台地の東端付近に築造された墳丘長181m、二重周濠をあわせた全長は354ｍの前方後円墳です。文禄５（1596）年に発生した伏見地震により墳丘盛土が崩落して、墳丘各部を大きく変形させています。埋葬施設を含む後円部最上段も残存しませんで

したが、石積の基礎が残存し、横穴式石室を用いたことがわかりました。またこの上面からは甲冑や胡籙、鉄鏃、刀装具、玉類などの副葬品の細片とともに、阿蘇ピンク石や二上山白石で作られた複数の家形石棺の破片が出土しています。外表には葺石を施し、墳丘や内堤には円筒埴輪を巡らせています。内堤張出部には200点以上の家、人、動物、器財などの形象埴輪を整然と配置した埴輪祭祀場がみつかり、大王墓の埴輪祭祀の全容がはじめて明らかになりました。これらの埴輪は新池遺跡で製作されたもので、５世紀の太田茶臼山古墳の築造に伴い開窯し、５世紀後半に中断した埴輪生産を再開させています（新池９～18号窯）。造出や埴輪祭祀場からみつかった土器はTK10型式（古段階）が中心で、埴輪の特徴からも６世紀前半に築造されたと考えられます。同時期の列島最大の前方後円墳、すなわち大王墓であり、築造年代と文献史料に記載のある陵墓所在地から継体大王（天皇）の三島藍野陵とされます。

３.三島の大首長墓

島上郡にあたる芥川西岸の奈佐原丘陵には、３世紀後半から100ｍ級の前方後円墳を累代的に営む弁天山古墳群があり、丘陵裾部の郡家車塚古墳や前塚古墳などを含めて５世紀初頭までの大首長の墓域でした。島下郡では継続的ではないものの紫金山古墳や将軍山古墳などの100m級の前方後円墳が築造されています。５世紀中葉になると富田台地西方に、墳丘長226ｍの陪冢を伴う巨大前方後円墳・太田茶臼山古墳が突如として築造され、その周囲に中型の前方後円墳を含む中小首長墓や密集した小型低方墳など、明確な階層構成をもつ古墳群が出現します。新池遺跡の窯を伴う埴輪生産の導入を含めて大きな画期となっています。この時期、弁天山古墳群では再び丘陵上で40m級の前方後方墳や前方後円墳が築かれていますが、その勢力は前代には及びません。その後、太田茶臼山古墳に直接後継する巨大古墳はなく、中型の前方後円墳も５世紀後半には築造が停止します。そして、６世紀に入ると島上、島下郡の単位で大首長墓の造営が顕著となり、とりわけ島下郡では比較的安定した造墓活動が行われています。

島上郡

６世紀初頭前後の中将塚古墳（前方後円墳50m）、続いて６世紀中葉に昼神車塚古墳（前方後円墳56ｍ）が同一丘陵上に築造されます。弁天山古墳群や今城塚古墳の立地する芥川西岸ではなく、前期以来、丘陵上に中小の首長墓を造営してきた東岸に、地域最大の前方後円墳が営まれるようになります。

２基ともに埋葬施設などの詳細は不明ですが、円筒埴輪の最下段の突帯に特徴があり、粘土紐をナデつけた後に未整形で終わる断続ナデ技法Ｂ（鐘方・中島1992）を用いる特徴が

あります。また昼神車塚古墳では猪を犬が追う狩猟埴輪や角笛をもつ人物、力士などの形象埴輪が樹立されていて今城塚古墳の形象埴輪との関連性が注目されますが、共通する埴輪の種類が少なく、表現等についての類似性は高くないようです。ただ円筒埴輪では今城塚古墳に類似する新池産とみられるタイプがわずかにみられることから一定の関連性は認められ、今城塚古墳に併行するか、すぐ後に築造されたと考えられます。

島下郡

今城塚にやや先行して茨木川北岸に南塚古墳（前方後円墳50m）、６世紀中葉に青松塚（せいしょうづか）古墳（円墳20m）、６世紀後葉に海北塚（かいぼうづか）古墳（円墳25m以上）が順に営まれ、茨木川（佐保川）東岸に耳原（みのはら）古墳（円墳23m）、７世紀後葉に鼻摺（はなずり）古墳（方墳33m）が築造されています。耳原古墳は家形石棺の形態から海北塚と近い時期に築造されたとみられます。

茨木川北岸の３基は前期の紫金山古墳に隣接して築造されており、前代の大首長墓に連なることを意識したものとみられます。前期の将軍山古墳の周囲に展開する後期の将軍山古墳群なども同様でしょう。南塚古墳は三島でいち早く畿内型の横穴式石室と（家形）石棺を採用し、馬具などの豊富な副葬品をもつ継体朝を代表する大首長墓です。南塚古墳の横穴式石室は右片袖式（みぎかたそでしき）（玄室奥壁側からみて右側に袖部）で畿内の大型古墳と対比可能な特徴をもちますが、青松塚古墳では左片袖式（ひだりかたそでしき）となり、緑泥片岩（りょくでいへんがん）の組合式石棺（くみあわせしきせっかん）をもつ海北塚古墳もそれを継承するなど在地的な特徴が強くなるとされます（富山2007）。袖部の形状は耳原古墳の段階で両袖式（りょうそでしき）に変遷します（図５）。

４.三島の中小古墳

大首長のもと小地域を治める中小首長墓とみられる古墳は、大首長墓と同様に４世紀代には丘陵上に立地し、小型の竪穴式石槨（たてあなしきせっかく）や粘土槨（ねんどかく）を埋葬施設としています。４世紀末頃に大首長墓が丘陵裾部に移ると、５世紀前葉には総持寺古墳群など富田台地上で小型低方墳の密集した造営が顕著となります。そして５世紀末頃にはそれらが円墳化し古式群集墳（太田、中条、春日古墳群など）へと移ります。こうした古墳は後世の耕作などにより墳丘が削平され、埋葬施設は失われていることが多いものの、本来は木棺を直葬したものとみられます。なお５世紀代においても先述の弁天山古墳群や紅茸山（べにたけやま）古墳群などは丘陵上に中小首長墓の築造を継続しています。

古式群集墳は６世紀前葉に造墓活動を停止するものが多く、中葉前半になると新たに丘陵部に横穴式石室をもつ中小の円墳－新式群集墳の造営が始まります。とくに塚原古墳群は20支群、合計100基以上に及ぶ三島最大の規模を誇ります。埋葬施設の横穴式石室は概ね片袖式→両袖式→小石室へと変遷します。

横穴式石室の受容

中小古墳における横穴式石室の採用のはじまりは大首長墓と同じ６世紀前葉に遡り、石室の残存状態が悪く詳細は不明なものの、出土した土器などから将軍山４号墳や塚原G1号墳（註２）が古く位置付けられます。それに続く６世紀中葉（前半）の安満山（あまやま）B1号墳、塚穴4a号墳、そしてやや遅れて中葉（後半）には安威12号墳、塚脇F1号墳、梶原B1号墳などの横穴式石室を採用する古墳が築造されます。これらは新たに群集墳を形成する契機となった古墳で、６世紀中葉には主要な古墳群で横穴式石室の採用がはじまります。また新池古墳や闘鶏山（つげやま）A1号墳など継続しない単独的な立地の中小古墳にも横穴式石室の採用がはじまっています。

なお、竪穴系の埋葬施設は６世紀前葉の須恵器をもつ慈願寺山12号墳や真上２号墳などで木棺を直葬しており、この段階までは一般的な埋葬形態だったとみられます（註３）。

横穴式石室の特徴

三島の横穴式石室については海北塚古墳や塚穴4a号墳など、同時期の大和や河内と比べて、小ぶりの石材を用いるなど古い様相を示すと特徴がみられるとされます（富山2007、横田2007）。中小古墳では石室上半部が残存していない例も多く詳細な比較はできませんが、６世紀中葉の塚穴4a号墳や闘鶏山Ａ１号墳、またやや新しい塚原B41号墳、塚脇F1号墳などは、左片袖式の構造となっています。これは大首長墓の青松塚古墳と海北塚古墳が２代にわたり左片袖式を用いたことが、横穴式石室導入期の中小古墳に影響したものとみられています。なお、新池古墳や塚原Ｇ１号墳のように玄室幅が1.1mしかないきわめて小さな石室を用いていることは注意されます。

埴輪の生産・供給

今城塚古墳の埴輪生産を担った後期の新池遺跡で、周辺の中小古墳に埴輪を生産・供給したかは、未調査の埴輪窯が多くよくわかっていません。ただ、新池遺跡出土品には今城塚古墳に供給されたものとは異なる特徴をもつ小型の円筒埴輪や人物埴輪、石見型（儀仗（ぎじょう）形）埴輪などが出土していることから、周辺の古墳への供給を意図していたことは確かでしょう。このうち小型の円筒埴輪は茨木市太田北古墳群の埴輪棺と類似しています。また、塚原古墳群のB41号墳やD1号墳などで今城塚古墳の埴輪と似た特徴をもつ埴輪などがみつかっていますので、新池産か否かは検討を要しますが、埴輪の樹立を続けていた６世紀中葉の一部の古墳に対して、新池遺跡や今城塚古墳は一定の影響を与えたとみられます。

５．おわりに

継体朝の三島の中小古墳は、伝統的な竪穴系の埋葬施設から横穴式石室へ移行する過渡

期にあり、継体朝後の６世紀中葉に基数が大きく増加する大きな画期があったとみられます。これは新式群集墳の爆発期的な造営によるもので、背景には政権と地域の有力家長層の関係が変化し、直接的な関係性の構築があったとされます（和田1992）。大王墓である今城塚古墳の築造がそれにどのように影響を与えたのかは、残念ながら埋葬施設などの比較できる情報が少なく詳らかではありません。南塚古墳や後継首長墓から推測するとすれば、次代には在地化が進んでおり、三島地域での大王墓の造営という継体朝の特殊な状況、その地域における影響は限定的なものだったのかもしれません。

今後、前後の時期を含めた中小古墳の資料集成と年代的な位置付けの整理を行い、検討を進めたいと思います。

《註》

（註１）大首長等の呼称や群集墳の分類等ついては和田晴吾氏の研究に則った（和田1992）。ただし「大王墳」や「大首長墳」等の「墳」は「墓」へ読み替えている。

a類　方形周溝墓（弥生時代）

b類　小型低方墳（古墳時代前期・中期）

c類　円墳（小型低方墳より変化、古墳時代後期前半）→古式群集墳

d類　畿内型横穴式石室をもつ円墳（古墳時代後期中葉）→新式群集墳

e類　小型化した横穴式石室や小石槨などをもつ方墳（飛鳥時代）→終末期群集墳

（註２）竪穴式石室と報告されるが、石室の形状から小型の横穴式石室の可能性があり、ここでは新池古墳などと類似した横穴式石室として紹介する。その是非については改めて検討したい。

（註３）埋葬施設は削平されているため不明だが、川西４号墳などは木棺直葬が続いた可能性がある。

《参考文献》以下の文献のほか、各報告書を参照した。

和田晴吾1992「群集墳と終末期古墳」『近畿１』新版古代の日本５　角川書店

鐘方正樹・中島和彦1992「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会

森田克行2006『今城塚と三島古墳群』同成社

富山直人2007「大阪北部の横穴式石室」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』

横田真吾2007「北摂津の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会

森田克行 2011『よみがえる大王墓　今城塚古墳』新泉社

茨木市史編さん委員会2014『新修 茨木市史 第７巻 史料編 考古』

名　称	墳　形	墳　丘	埋葬施設	石室袖部	玄室長	玄室幅	玄室長幅比	時　期	副葬品
今城塚古墳	前方後円墳	181m	横穴式石室	不明	―	―	―	6世紀前葉	

名　称	墳　形	墳　丘	埋葬施設	石室袖部	玄室長	玄室幅	玄室長幅比	時　期	副葬品
中将塚古墳	前方後円墳	50m	不明	―	―	―	―	6世紀前葉	―
南塚古墳	前方後円墳	50m	横穴式石室	右片袖式	5	2.5	2.00	6世紀前葉	金銅装馬具3組、衝角付冑、挂甲、多量の鉄鏃、鉄矛、玉類など
昼神車塚古墳	前方後円墳	56m	不明	―	―	―	―	6世紀中葉	―
青松塚古墳	円墳	20m	横穴式石室	左片袖式	3.3	2	1.65	6世紀中葉	金銅装馬具、銅鏡、鉄刀、鉄矛、鉄鏃、農工具、玉類など
海北塚古墳	円墳	25m～	横穴式石室	左片袖式	4.2	2.3	1.83	6世紀後葉	金銅装馬具3組、単龍環頭大刀など
耳原古墳	円墳	23m	横穴式石室	両袖式	6.8	2	3.40	6世紀後葉	―

表１　三島における６世紀の大王墓・大首長墓

名　称	墳　形	墳　丘	埋葬施設	石室袖部	玄室長	玄室幅	玄室長幅比	時　期	副葬品
慈願寺山12号	方墳	一辺16m	木棺直葬	―	-	-	-	6世紀前葉	鉄剣(鹿角装柄装具)、短刀、刀子、鉄鏃、馬具(轡)
真上2号墳	円墳	22m	(木棺直葬)	―	-	-	-	6世紀前葉	鉄刀、鉄矛
慈願寺山1号	円墳	―	木棺直葬	―	-	-	-	6世紀前葉	―
塚原G1	円墳	11.5m	(横穴式石室)	(左片袖)	2.7	1.1	2.45	6世紀前葉	―
将軍山4号墳	(円墳)	(30m)	横穴式石室	不明	-	-	―	6世紀前葉	鉄刀、鉄矛、鉄鏃、刀子、鉋、玉類
塚原G4	円墳	11.5m	横穴式石室	(右片袖)	2.4	1.4	1.71	6世紀中葉	鉄鏃
安満山B1号墳	円墳	17m	横穴式石室	右片袖	3.15	2	1.58	6世紀中葉	鉄刀、鹿角装刀子、鉄鏃、玉類
塚穴4a号墳	(円墳)	(15m)	横穴式石室	左片袖	2.8	2.1	1.33	6世紀中葉	金環、馬具(素環鏡板付轡)、鉄鏃
新池古墳	円墳	11m	横穴式石室	右片袖	2.2	1.1	2.00	6世紀中葉	刀子、鉄鏃、鋳造鉄斧
闘鶏山A1号墳	不明	(15～20m)	横穴式石室	(左片袖)	3	1.8	1.67	6世紀中葉	金環、玉類
川西4号墳	円墳	14m	不明	不明	-	-	―	6世紀中葉	

表２　三島における６世紀前半の中小古墳

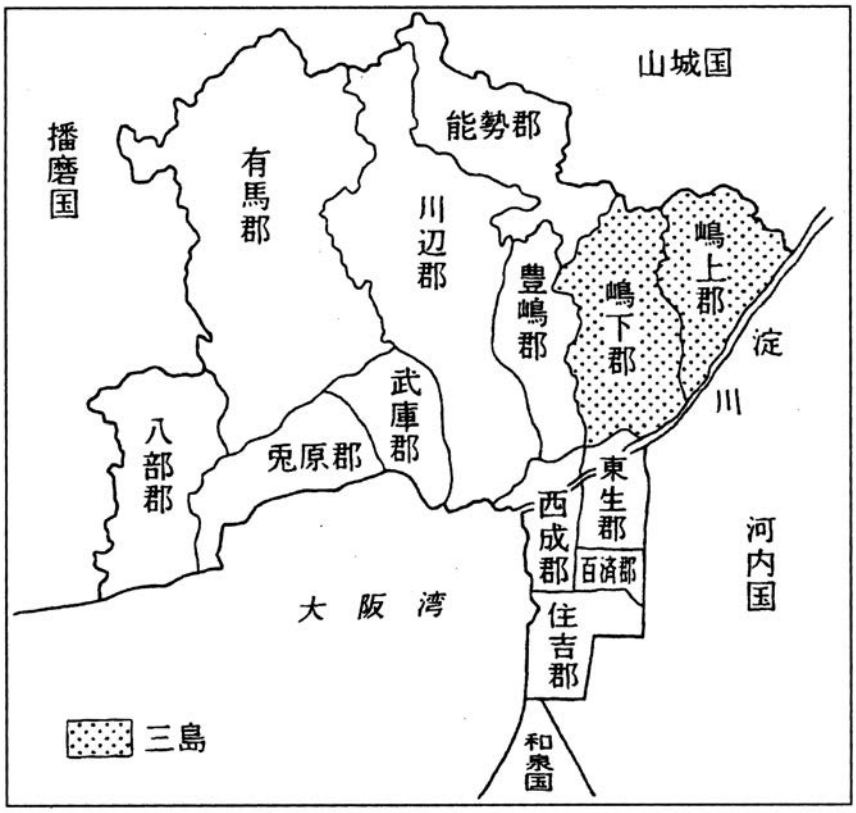


図１　島上郡・島下郡の位置

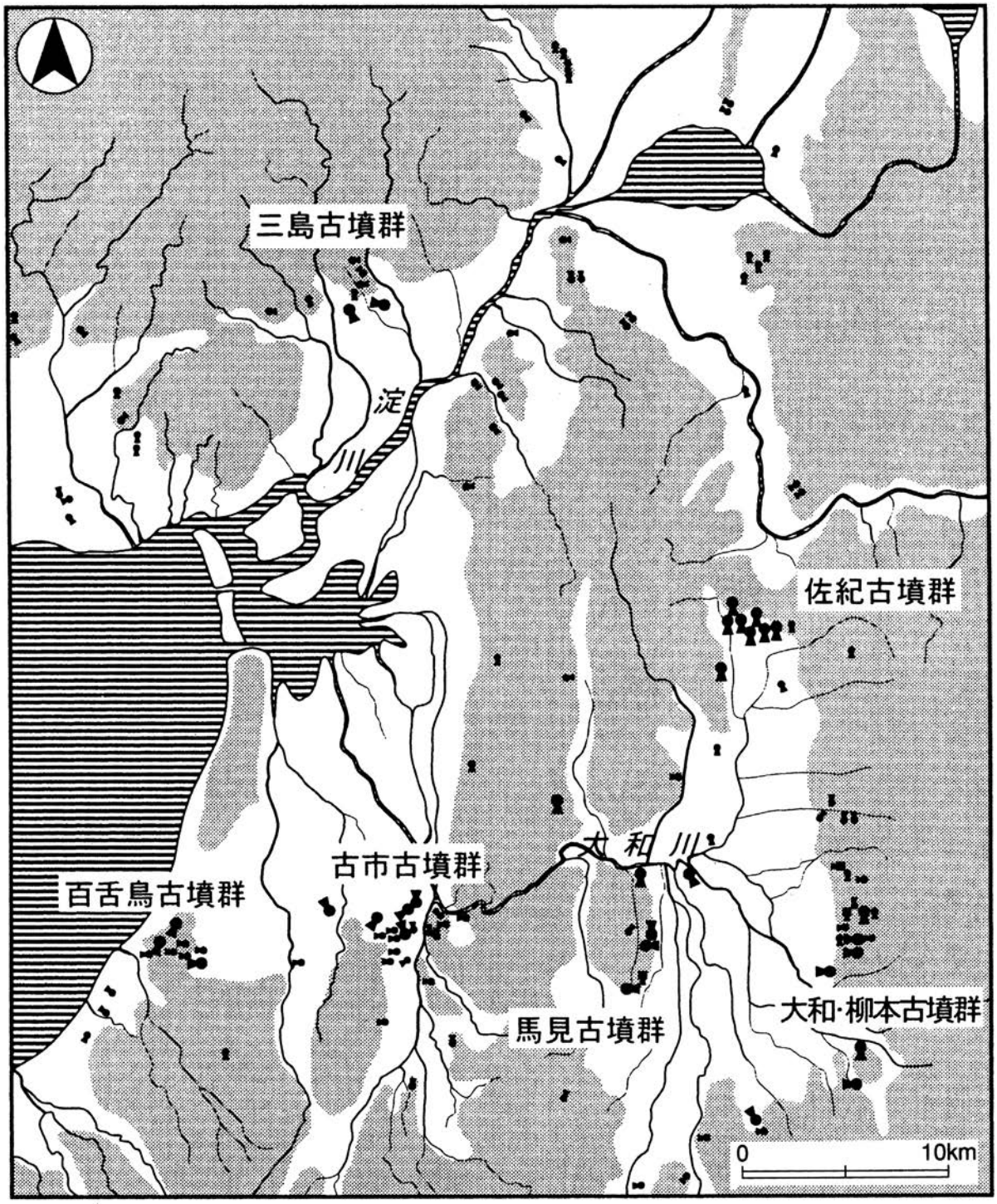


図２　三島古墳群の位置

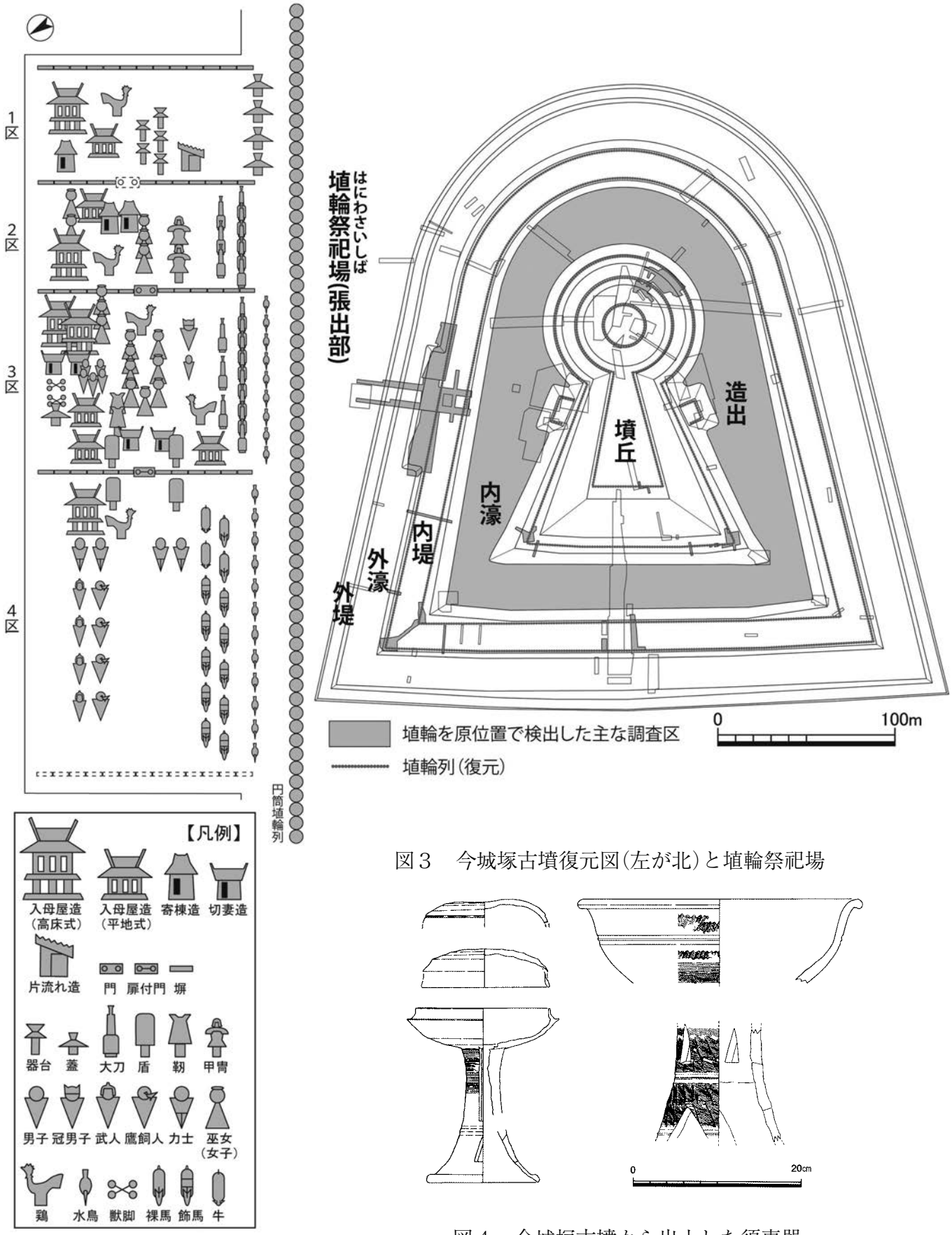


図３　今城塚古墳復元図(左が北)と埴輪祭祀場

図４　今城塚古墳から出土した須恵器

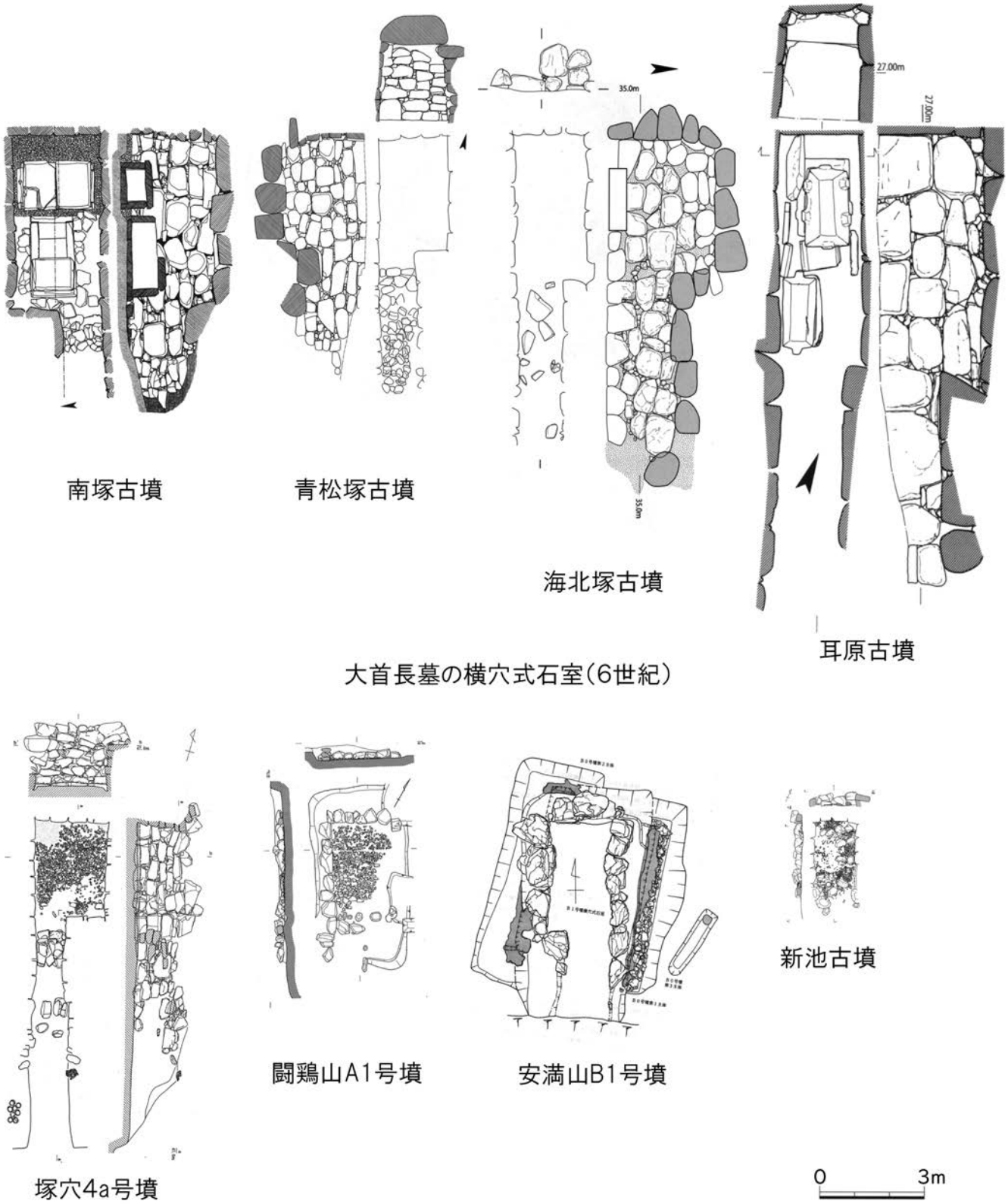

南塚古墳
青松塚古墳
35.0m
35.0m
海北塚古墳
27.00m
27.00m
耳原古墳
大首長墓の横穴式石室(6世紀)
塚穴4a号墳
闘鶏山A1号墳
安満山B1号墳
新池古墳
0
3m
中小古墳の横穴式石室(6世紀前半)

図５　三島の横穴式石室

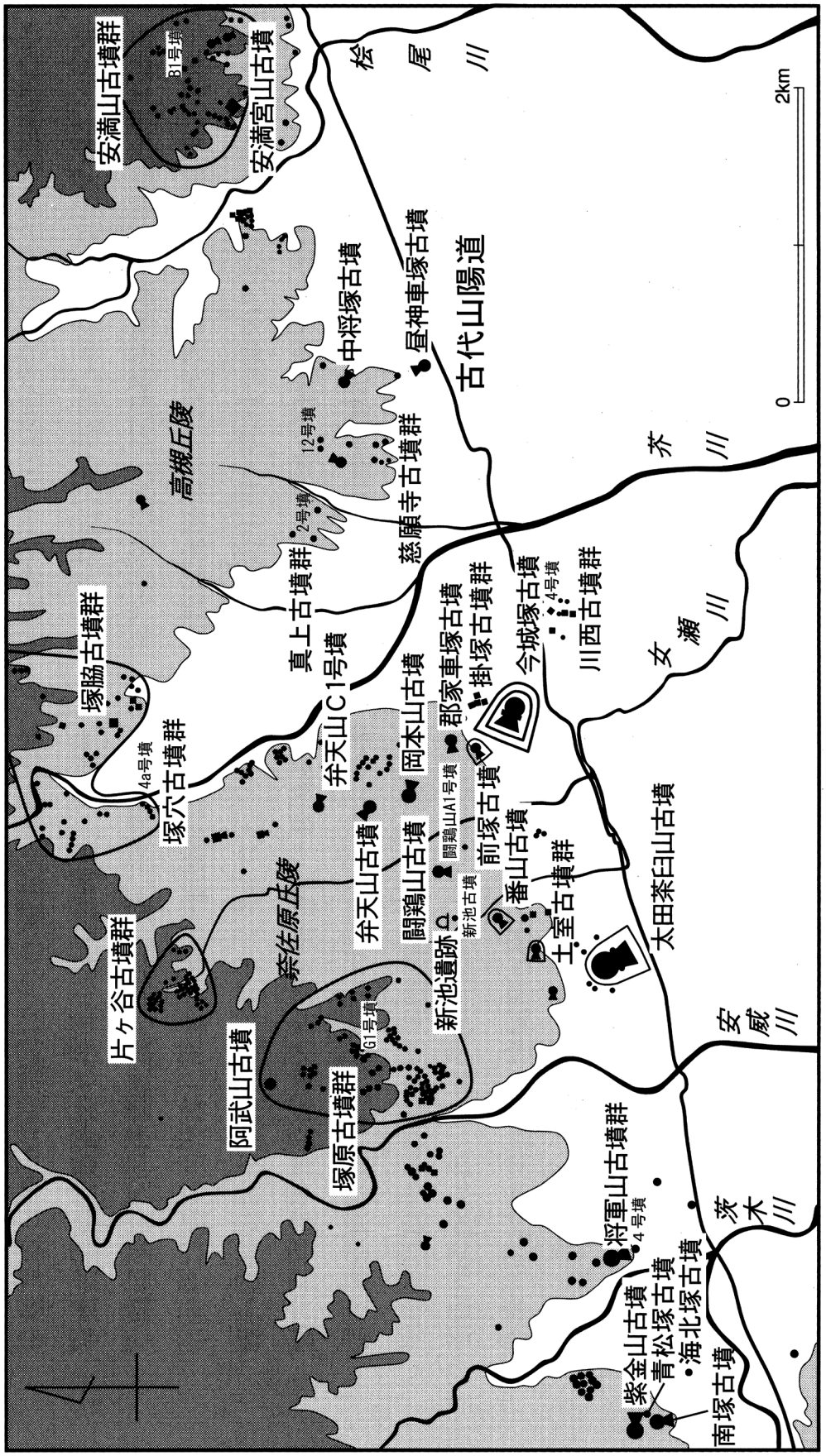


図６　三島の主要古墳の位置

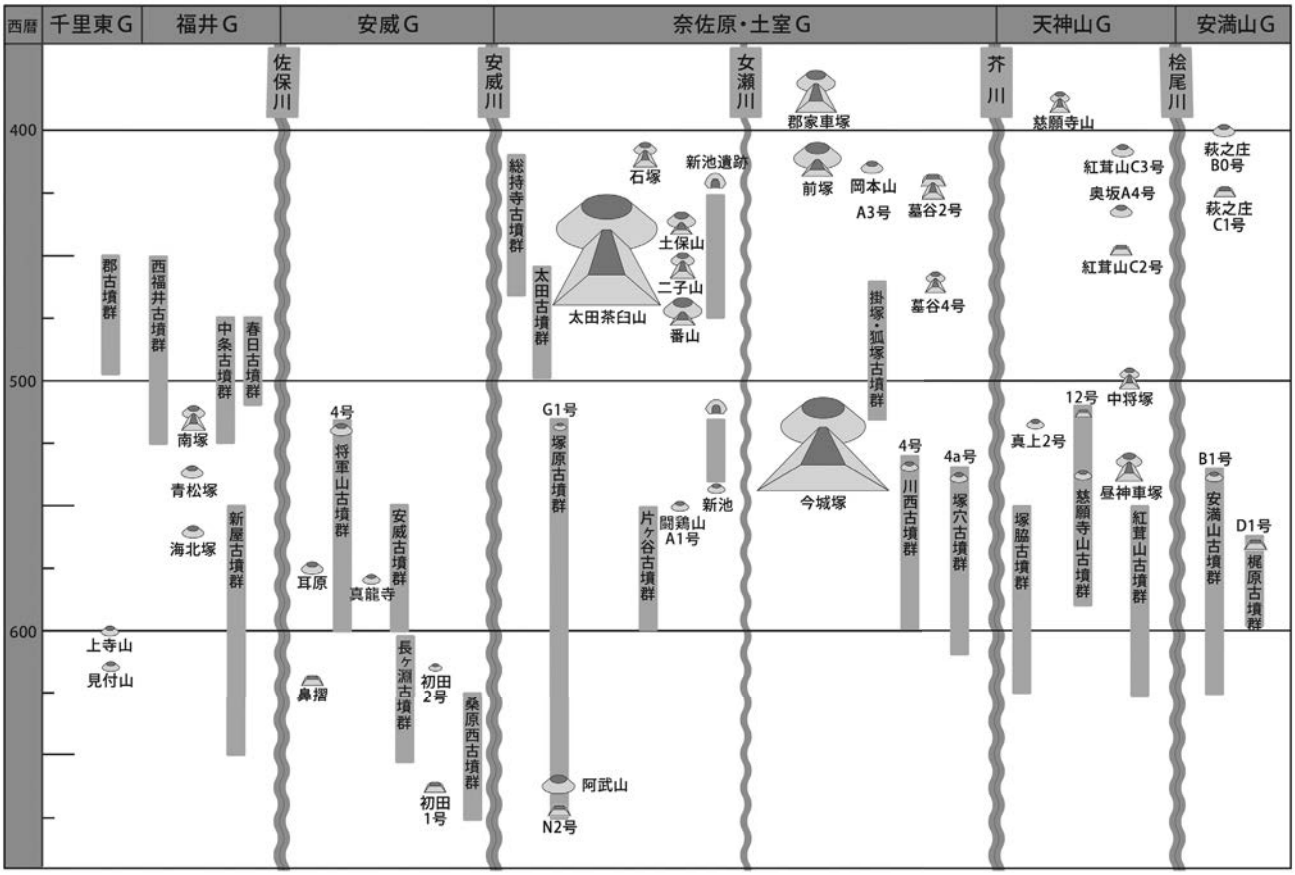


図７　三島の古墳編年表（古墳時代中期～終末期）

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

http://www.kyotofu-maibun.or.jp
公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel （075） 933-3877（代表）　Fax （075） 922-1189